24 縁発趣論

スシラ・サヤレー

翻訳：Paññādhika Sayalay

目次

紹介 2
１、因縁（hetupaccayo） 4
２、所縁縁（Ārammaṇapaccayo） 10
３、増上縁（Adhipatipaccayo） 13
４、無間縁（Anantarapaccayo） 23
５、等無間縁（samanantarapaccayo） 24
６、倶生縁（Sahajātapaccayo） 24
７、相互縁（Aññamaññapaccayo） 26
８、依止縁（Nissayapaccayo） 27
９、親依止縁（Upanissayapaccayo） 30
10　前生縁（Pureja-ātapaccayo） 37
11　後生縁（Pacchā　jātapaccayo） 38
12　数数修習縁（Āsevanapaccayo） 39
13　業縁（Kammapaccayo） 43
14　異熟縁（Vipākapaccayo） 48
15　食縁（Āhārapaccayo） 51
16　根縁（Indriyapaccayo） 57
17　禅縁（Jhānapaccayo） 61
18　道縁（Maggapaccayo） 63
19　相応縁（Sampayuttapaccayo） 71
20　不相応縁（Vippayuttapaccayo） 73
21＆24　有縁と不離去縁（Atthipaccayo＆Avigatapaccayo） 74
22&23　無有縁と離去縁（Natthipaccayo　&　Vigatapaccayo） 75
24 縁グループ分類 76

紹介

《アビダンマ論》には合計 7 部の論があるが、《発趣論》はその中の七番目に相当し、最も奥深い論書であると言われている。仏陀は、ブッダガヤで成道した後の、第四番目の週において、「アビダンマ」の考察を開始した。彼が、第一番目の《法聚論》から始めて、合計六部の論を考察していた時、彼の身体に光芒を見ることはなかったが、しかし、彼が第七番目の《発趣論》を思惟するやいなや、仏陀の一切知智が十分に発揮され、その智慧の縁によって、身体は強烈な六色の光芒を放った――紺、黄、赤、白、橙と、その五色の混合色である。現在、我々の見る仏旗は、まさにこの事に基づいて、デザインされているのである。

もし、大きな魚を小川に入れたならば、この大きな魚は、非常な苦痛を感じるに違いない。なぜか？というのも、小川が小さすぎて、自在に泳ぐ事ができないが故に。しかし、もし魚を大海の中に放ったならば、彼は悠悠と泳ぐことができる。同様に、仏陀の一切知智は、《発趣論》を省察した時に初めて、頂点に達する事ができた。《発趣論》は、《アビダンマ論》の中に列挙される名色法の（＋相互の）間において、それは、如何なる種々の方式によって、連携が生じるのかを、詳細に述べているものである。それは縁起法を解説しているが、それはすなわち、縁法がどのようにして、特有の縁力に依存して、縁生法を生起させるのか、を述べているのである。

故に、《発趣論》全体はすべて、縁起法について、述べているのだと言える。その中（＝縁起法）には、不変の実体、または主宰（＋者）というものはなく、衆生もなく、あなたもなく、私もなく、彼もなく、ただ身体と心が相互に関係し合う過程があるのみであって、それらは純粋に、無常であり、無我なる現象である（＋ことが分かる）。

仏陀は言う：「縁起を見る者は、仏を見る；仏を見る者は、縁起を見る。」縁起とは、仏教の全体の教理の中において、最も重要な教法である。縁起を理解して初めて、無我の真諦を理解する事ができるのである。本書において検討されるのは、名法と色法の間において、どのようにして相互依存の関係が成立するのか、という問題であり、それはすなわち、諸縁が持つ所の特有の支持力――24 縁について語られているのである。

一、縁法（paccayadhamma）：これは、他の法縁となる法である。この縁法は、生じる事、支える事、または他の法を維持する事によって其の縁となる縁である。
二、縁生法（paccayuppannadhamma）：これは、縁法の支援を受ける法である。それは、縁法の支援の下、生起するかまたは、その存在を持続させるものである。たとえ

ば「12 因縁」の第一支「無明縁行」のその意味は、無明が生起するが故に、行が生起する、という事である。無明は縁法であり、行は縁生法である。
三、縁力（paccayasattai）：これは、縁法が、縁生法の縁となる特別な方式である。合計 24 の縁力が存在する。

「無明縁行（無明の縁によって行あり）」を例にとると、無明は一体、どのような方式によって、行を生起せしめるのか？どのような縁力が無明を帯動して、行を生じせしめるのか？このことは、24 縁によって、初めて解明される。
24 縁とは：
（１）因縁（hetupaccayo）
（２）所縁縁（ārammaṇaṇpaccayo）
（３）増上縁（adhipatipaccayo）
（４）無間縁（anantarapaccayo）
（５）等無間縁（samanantarapaccayo）
（６）俱生縁（sahajātapaccayo）
（７）相互縁（aññamaññapaccayo）
（８）依止縁（nissayapaccay）
（９）親依止縁（upanissayapaccayo）
（１０）前生縁（purejātapaccayo）
（１１）後生縁（pacchājātapaccayo）
（１２）数々修習縁（āsevanapaccayo）
（１３）業縁（kammapaccayo）
（１４）異熟縁（vipākapaccayo）
（１５）食縁（ahārapaccayo）
（１６）根縁（indriyapaccayo）
（１７）禅縁（jhānapaccayo）
（１８）道縁（maggapaccayo）
（１９）相応縁（sampayuttapaccayo）
（２０）不相応縁（vippayuttapaccayo）
（２１）有縁(atthipaccayo）
（２２）無有縁（natthipaccayo）
（２３）離去縁（vigatapaccayo）
（２４）不離去縁（avigatapaccayo）

緬甸（ミャンマー）では、危険に出会った時、または恐怖を感じる時、この 24 縁を称えると、外部にある種々の危険を避けることが出来、また、多くの功徳を獲得する事ができると言う。こうしたことから、24 縁のパーリ語を暗記する事は、我々の修行にとってもよい事である（＋と思われる）。以下において、私は、私の有限な仏法の知識と理解に基づいて、分かり易い言葉を用いて、仏陀の奥深い法義を説明したいと思う。

１、因縁（hetupaccayo）

hetupaccayo の hetu は、因という意味であり、paccayo は、支援、援助または縁という意味である。縁法は、何を通して、縁生法を支援・援助するのか？一番目は、因縁（hetupaccayo）である。
この縁・・・縁法の作用は、ちょうど根のように、縁生法を安定させるものである。この縁の縁法は、「因」と言う名前の、六種類の心所である。52 種類の心所があるが、その中の貪・瞋・痴、無貪、無瞋・無痴の六つの心所を「因縁」という。因は、根本、という意味である。ちょうど一本の根のように、（＋木にとって）最も重要なのは根である。木の根が切られたならば、木は倒れてしまう。因縁というこの六つの心所は、木の根と同じように重要であって、それは縁生法を非常に安定させるのである。

貪・瞋・痴は、不善根、または不善因縁と言う。というのも、それは己自身を害し、他人を害するが故に。それは悪業の根本である；無貪・無瞋・無痴は善根または美根と言う。というのも、それは己自身を利益し、他人を利益するが故に。それは一切の善業の根本である。ここにおいて、我々は、貪・瞋・痴の意味に深入りしないが、しかし、貪・瞋・痴は、ただ単なる大貪・大瞋・大痴に留まるものではなく、少しでも貪があれば、貪であるという事を強調したい。たとえば、何かを食べる時、食べる事を楽しんでいるのも貪である。心中に些かの不興があれば、瞋恚であり、他人を叩く、怒鳴る、殺人をするだけが瞋恚なのではない。故に、ここでいう所の貪・瞋・痴は、最も微細なものから、最も強烈なものまで、異なるレベルの、すべての貪・瞋・痴を含む、と言うのである。

この三つの不善根は、身・口・意における駆動力である。我々は、三つの不善業は、身体を通してなされる事を知っている。どの三つか？殺生、偸盗、邪淫である。それらは、何の影響を受けてなされるのか？
それらの根本とは何か？何が、一人の人間を、殺生させたり、偸盗させたり、邪淫させたりするのか？

それらの根本は、貪・瞋・痴である。故に不善業を為すとき、我々はどのような動力が、我々をそのようになさしめているのかを、理解する必要がある。ひとたび不善業をなしたならば、それは業力を残す。業力がひとたび熟すならば、その果報が生じる。それはたとえば、四悪道に生まれる等の。

同様に、我々は、また善業を為す事もある。例えば布施、持戒、聴経、功徳の回向など等。では、どのような因と縁が我々をして、善業をなさしめるのか？その根本は何か？それは無貪・無瞋・無痴である。我々が善業を為すとき、それは善の果報を齎すが、しかし、善業もまた、我々の輪廻を引き延ばす（＋力がある）。故に、不善業だけが、我々の輪廻を長引かせるだけでなく、世間的善業もまた、我々の輪廻を長引かせるのである。この六種類の因――善と不善は、我々の各種の性格と命運を塑性する原動力となる。何に対しても喜ぶ人は、貪の性格が強く、怒り易い人は、瞋の性格が強い。また、痴の力が強い人もいれば、智慧の力が強い人もいる。たとえば、布施は、己自身の持っているものを他人に分け与えようとする行為で、自分自身の所有物に執着しないという事であるが、これは無貪である。

もし、我々が長期間布施を続けるならば、不断の過程において無形の内に、我々自身の、無貪の性格を、塑性している事になる。ある種の人々にとっては布施は困難である。というのも、彼には貪と執着の性格があるが故に；
ある種の人々にとっては、布施は容易である。というのも、この長い輪廻の過程の中において、彼はすでに、無貪の性格を塑性したが故に。

故に、我々は、己の習気を改善しようとするならば、先に、己自身の性格が、貪が重いのか、瞋が重いのか、痴が重いのか、を理解しなければならない。その後において、我々は己自身の欠点に応じて、それを糺さなければならない。たとえば、自分が、瞋根の強い人でありながら、更に瞋恚を自由放任にして、糺す事をしなければ、それはちょうど山から転げ落ちる雪だるまのように、転がれば転がる程大きくなり、その後に、瞋根を取り除こうとしても、大いに困難となる。瞋恚の対処方法は「慈愛」である。常に慈愛を修習する――

「私（＋の心）は、敵意から遠く離れますように、一切の衆生の平安と幸福を願い、一切の衆生の身・心の苦痛からの遠離を願う」という願いは、我々の瞋恚の心を退治することができる。貪を退治する為には、布施をするだけでなく、欲愛、すなわち感官の感受等も、遠離しなければならない。痴を退治する為には、仏法を聞かねばならない。仏法を聞いた後に初めて、我々は何が善で、何が不善であるか、何をしなければならず、何をしてはいけないかを、知ることができる。

もし、仏法を聞かないのであれば、我々は、我々自身の限界のある智慧でもって、善悪の区別をつけるのは難しい。しかし、仏法を聞いた後であっても、我々は、聞いた法に関して、よく思惟しなければならず、なんでもかんでもそのまま、受け入れてはならない。というのも、もし聞いたのが邪法であり、かつ、己自身がそれに対して、厳しく省察・審査しないのであれば、岐路に迷う事がありるが故に。そうであるから、法を聞いた後、智慧をもって省察しなければならない。もし、（＋聞いた法が）正しいならば、我々はこれに依って、円満成就するまで、修行しなければならない。仏法を聞く事、思惟する事、修行する事は、智慧を育てる近道である。

貪・瞋・痴の三毒の中で、仏陀はただ貪と痴だけが輪廻の根本だと述べている。どうして、瞋恚が含まれないのか？
我々は、アナーガミ聖者を検証してみよう。アナーガミの意味は、「不還」である。彼は徹底的に瞋恚と、欲界の貪を断ちきって、欲界には二度と戻ってこないのであるが、しかし、彼は梵天界に生まれる事には執着している。故にアナーガミ聖者は、いまだ輪廻するのである。この事から、輪廻の根本は、貪と瞋である事が分かる。しかし、その場合でも痴が元凶である。（＋痴が）貪と瞋に行動を促すが故に、それは一切の不善の潜在的根なのである。故に、最大の禍は痴なのである。

貪・瞋・痴と無貪・無瞋・無痴は、縁法であり、それらの縁生法は、一つの因ごとに相応する名法及び俱生の色法である。俱生色とは、結生の時に生起する業生色、及びその生命の生かされている間生起する所の心生色である。それはちょうど、根というものが、樹木を存在させ、成長させ、安定させる根本であるのと同じように、これらの因は、縁生法を誘発し、かつそれらを安定させる。

我々は先に貪因を研究したい。というのも、貪愛は輪廻の根本であるが故に。我々は、貪がどのように生起するのかを知らなければならない。知ることによって、我々は、生起した貪を調伏することができる。
貪愛はどのようにして生起するのか？
通常、貪愛は、喜ばしい、愛すべき六塵の上に建立される。もし、何かの物が喜ばしくもなく、愛すべきでもない時、我々はそれに執着する事はない。ちょうど、一人の美人が、他人の目を引くように、醜悪な女性が他人の目を引く事が無いように；同様に、喜ばしく、美しく、愛すべき六塵――色、声、香、味、触、法は、我々の貪を誘発し、それらを得ようとして、業を造る。

我々が六塵を享受している時、それらは確かに、我々に楽しさを齎す。たとえば、テレビの連続ドラマを見る事が好きな人は、ドラマ（愛すべき色）を見る時、心は非常に

楽しくなる；音楽（愛すべき音）を聴くのが好きな人は、音楽を聴くと、心は非常に楽しくなる；香水が好きな女性は、香水（愛すべき香）を身に振ると、仕事をしても楽しくなる。喜ぶべき、愛すべき六塵は、確かに我々に楽しさを齎してくれる。そしてそうであるが故に、衆生はその中に沈潜してしまう。たとえこれらの欲楽に禍があるとしても、人々は、この欲楽に対する執着を、放棄することができない。なぜか？
というのも、貪根心が悪さをしているのである。

当然なことながら、もし、いまだ真正に欲楽の禍を見通すことのできないのであれば、人々がそれを放棄する事もまた、困難なのである。《中部》（Majjhimanikaya）の中で、仏陀は一つの物語を語っているが、それは我々に対して恐怖の気持ちを齎すもので、下記において、紹介してみたい。

ある人が、生まれながらの失明者であった。彼の友人が（＋自分の持っている）白い服は、非常に美しく、純白で、純潔、それを着ると、非常に心地よく、楽しい、と言った。この失明者は、心の中にある種の感慨が生まれ、その白い服に執着した。【ここでは、痴が縁法で、白い服に対する巨大な執着は縁生法で、縁力は因縁である】

彼は家に帰ると、母親に言った：
「お母さん、私に真っ白な、汚点のない服を下さい。私はそれが着たいのです。」
彼の母親は言った：
「あらら、あなたは生まれながらの失明者で、白だの黒だの青だのは、あなたにとってどうでもいいことです」
しかし、この失明者は、白い服に対して非常なる執着を擁していたので、母親がどのように言っても「見えなくても、私は白い服が欲しい」と言い続け、しかし、母親は取り合わなかった。
彼は友人の処へ行って
「あなた、私に純白で、汚点のない服をプレゼントしてくれませんか？」と頼んだ。
友人は「彼はどうせ目が見えない。私が彼に白いのをあげても、黒いのをあげても、どうせ同じことだ」と思い、友人は彼に炭より黒い、ボロボロの服を上げた。失明者は、嬉しくなってそれを身に着け、彼が夢に見、執着した願望は、実現した、と思った。
そして、彼は人々に向かって自慢した：
「おい、お前。私が着ている、この純潔で、白くて綺麗な服を、見てご覧なさい」
多くの人々は、彼を嗤った。
「この失明者はバカだ。彼が着ているのは黒くてボロボロの服なのに、彼は自分が白くて綺麗な服を着ていると思い込み、得意になって、喜んでいる。」
この事が母親の耳に入り、彼女は思った：

「ああ、私の息子。私に恥をかかせて。私は彼に真実を話そう。」
そして、息子の前で言った：
「息子よ。あなたが着ているのは黒くて、ボロボロの服です。それはあなたが思っているような白い服ではないのです」と。

しかし、この失明者はその服に対して、すでに強烈すぎる程の執着を擁していたので、母親の言う事を聞き入れず、この服を着続けて、あちらこちらに自慢して回った。
母親は思った：
「今、残された唯一の方法は、己の着ている服を、自分の目で見て確かめさせる事しかない。」
それで、彼女は彼を眼医者の所に連れて行って、息子の目を治してもらった。彼は、己が着ている服が、己が想像していたのとは異なって、黒くて、またボロボロであるのを見て、騙されたのだと思って、非常に怒り、すぐさま服を脱ぎ捨てた。彼は今、彼が執着し、追い求めた所の「白い服」を捨て去る事ができた。なぜか？
彼は「白い服」の本当の姿を知ったが故に。
【ここにおいて、無痴は、縁法で、手放す事ができる（＋という現象）は縁生法で、縁力は因縁である】

この失明者が、己の着ている服が、黒くてボロボロである事を知らないのと同じ様に、衆生は欲楽に迷い恋々するのは、衆生の心識の中に、いまだ無明、痴が存在していて、それが慧眼を覆っていて、物事の真相を見る事ができないが故である。ひとたび無明が取り去られた時初めて、我々は欲楽の真正なる禍を知ることができ、この時、初めて（＋執着を）手放すことができる。みなさんご承知の通り、欲楽は、確かに楽しみを齎すが、しかし、欲楽もまた無常であり、変化するものである。たとえば、我々は通常、身体を通して各種の欲楽を享受するが、しかし、我々の身体は、絶え間なく変化しており、衰弱し、病み、最後には死亡する。

もし、この事を見ようとしないのであれば、我々は必ずそれ（＝欲楽）に執着する。しかし、我々がこの身体をして無常であるものと見做す事ができるならば、我々は、この変化し、無常で、常に生・滅するものは、依存するに値わないと知るのである。依存することができないものに対して、我々はどのように対応するべきであるか？それへの執着を放下すのである。執着の放棄、それこそが解脱の道なのである。

煙草好きな人を例にとれば、彼は煙草が好きである、というのも、煙草は彼に楽しさを齎してくれるから。しかし、長期間煙草を吸ったのが原因で、彼は肺がんを患う（＋であろう）。肺がんはまさに、欲楽を享受した為の禍である。今、肺がんの蔓延を阻止

して、命を救う為には、彼は煙草への執着を放棄するしかない。同様の理由で、我々にとって、欲楽、六塵、我々の色身と命に対する執着をば、真正に放棄した時にのみ（＋救いがあるとしたら）、第一番目にしなければならない事、それの禍を見通す事である。禍を見通した後であるならば、我々は自動的、自然的に執着を手放すことができる。我々は、次に、無貪を見てみよう。無貪の人は健康な人である。というのも、無貪の人は、なんでもお構いなしに食べるという事をしないが故に、彼の身体は健康を保つことができる。【ここにおいて、無貪は縁法であり、身体の健康は縁生法であり、縁力は因・縁である。】

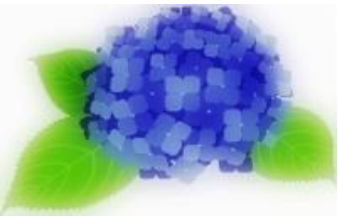
無瞋とは怒らない事で、無瞋の人は、青春渙発の人である。なぜであるか？
みなさんは以前経験した事があると思うが、我々は怒るやいなや、身体は発熱するが、これ（＝熱）は心生色によって造られるのである。怒りの心によって生じた、一つづつの八法聚色法の中には火界があり、この火は特別に強く、地、水、風界より強い（＋性質をもつ）。このような強烈な火は、人に皺を造りだし、頭髪は白くなる。無瞋の人は、あまり怒らない為に、特に青春を保ち、美しく、高価な化粧品を買わなくてもよく、ただ多く無瞋を修習すれば、青春を保ち、美しい人でいられるのである。

無痴（智慧のある事）は、長寿の縁法である。というのも、智慧ある人は、何が己にとって、利益であるか、何が己にとって不利益かを知っていて、悪を避けるが故に、長命になって 100 歳まで生きるのである。
【故に、無貪は健康を保つ縁法であり；無瞋は青春を保つ縁法であり、無痴は長寿を保つ縁法である】

現代は、青春の為、健康の為、長寿の為に、という各種のレッスンが流行している。というのも、これらは皆、人間の好むものであるが故に。多くの人々は青春を保ち、健康で長寿であるようにと、お金を払って、各種のレッスンを受ける。しかし、実は、これらは、仏法の中において、すべて存在しており、ただその理由は分からないものの、みなさんは最も重要な仏法を、手に取って応用しようとしないのである。仏法は、聞いた後、実践しなければならない。

聞いても実践せず、貴重な、無料のレッスン（＝通常、テラワーダの法話会は無料で実施される）を横に置いて、お金を使って種々のレッスンに通う。これは智慧ある人のする事ではないのである。次に、排毒について。
みなさんは身体の毒を排出する事に大いに興味を持つが、しかし、心の毒は、身体に対して更に大きな傷害を齎すのである。どうして、時間を使って、それを排出しないのか？
《黄帝内経》に言う；「百病は心より生じる」

しかし、我々は浅はかにも、己を害するのは、食べ物であったり、外部環境であったりすると思い込んでいる。多くの人々が罹患しているうつ病は、心理的な要因で発症しているのである。
心毒とは何か？ たとえば、怒り。人が怒る時、彼の血液は即刻黒色になるが、これが心毒である。あなたは、あなたの心の毒を、どのようにして排出するのか？　慈悲を拡散すれば、心の毒は排出される。こうした事から、我々仏教を学ぶ人間は、近くを捨てて遠くを求めることなく、仏法を実践して、己の利益とする事を知らなければならない。



２、所縁縁（Ārammaṇapaccayo）

所縁縁とは何か？
この縁の縁法は、六所縁であり、それは縁生法をして、その目標を取らせる為に生起する。六所縁の内の何か一つを、目標として取る心及び心所は、縁生法である。六所縁は、色、音、香、味、触と法である。触には、地、火、風の三界しかなく、水界を含まない。アビダルマによると、水界は、意識によってのみ覚知する事ができるもので、触覚では、感知することができない。

例えば、あなたが、洗面器の中の水を叩くとき、あなたは圧力を感じるが、この圧力は風大である。もし、あなたが冷たさを感じたならば、それは火大である。もし、あなたが水の柔らかさを感じたならば、それは地界である。水界の特徴――流動と凝集力は、触覚で確認するのではなくて、意識でもって覚知するのである。所縁縁の事に触れるならば、我々は、心路過程について理解しなければならない。心路過程は、アビダンマの中において、非常に重要な概念である。心路過程は、五門心路過程と意門心路がある。五門心路過程には、眼門心路過程、耳門心路過程、鼻門心路過程、舌門心路過程、身門心路過程がある。

先に、眼門心路過程について説明する。色彩所縁（色塵）は、同時に有分と眼浄色（またの名を眼根という）と衝突する。その衝突の一刹那、一つの有分は、生・滅して去る。その後に、有分波動が二個出て、（その後に）中断する。この三つの有分――過去有分、有分波動と有分断は、離心路過程と呼ばれる。次に続くのは五門転向心で、それの作用とは、心を所縁に向ける事である・・・ちょうど以下のように＜尋ねるが如く＞である：
これは何であるか？
色であるか？
音であるか？
味であるか？
などなど。

もし色彩であるならば、眼識が生起する。眼識は色彩を見ると、それは即刻滅し去り、次に領受心が生じて、この色所縁を領受（＝受け取る）する。領受心が滅し去ると、推度心が生じる。それ（＝推度心）は、推度（=推定）する；「これは何の色であるか？」推度心が滅し去ると、確定心が生起する。それ（＝確定心）は、色彩を確定した後、また滅し去り、引き続き、速行心が、所縁（＋の上を）駆け抜ける。我々の、すべての身・口・意の業は、速行心が造りだす。故に、心路過程全体でみれば、速行心が最も重要である。通常的な欲界における心路過程、たとえば、眼門、耳門、鼻門、意門など等、すべてにおいて、七つの速行心が生起する。

速行心の後の心は、彼所縁と言う。彼所縁は、速行心の所縁と同じ所縁を取る。彼所縁は通常、二回生起するが、これは、彼所縁の法則である。故に、三つの有分（離心路心）に、眼門心路の 14 個の心識を加えて、合計 17 個の心識がある。
【ここにおいて、縁法は色彩であり；縁生法は眼門心路の中の、色彩を認知する所の 14 個の心識と俱生心所である；縁力は所縁縁である】

所縁 ārammaṇa または ālambana は、心と相応する心所が、楽を取り（＝楽しみに執着し）、そこに留まる所の、目標である。心は、なぜ生起するのか？ 所縁の関係によって、である。ひとたび所縁がある所、心は生起する。そして、の上、所縁に引き付けられてしまう。たとえば、美しい声、音等を聞くと、我々の耳識は、音に引き留められてしまうのである。合計で、六つの所縁がある。すなわち、六塵――色、音（声）、香、味、触と法である。仏陀は、これらを、六個の強盗だと言っている。常に我々の六根――目、耳、鼻、舌、身体と意を打ち、襲うからである。色塵は我々の眼根を打ち襲い、我々をして、貪愛または怒り、恨みを生起せしめる；たとえば男性は、美人の女性を見ると、容易に貪が生起する。

もし、我々が喜ばしくないもの、恨んでいる人に会うならば、容易に瞋恚が生起する。音が我々の耳を打つとき、他人からの称賛の声を聴いて、我々の心は多いに貪を生じせしめる；他人からの批判の声を聞いた時、我々は大いに怒り、瞋を生起させる。味が我々の舌根を打ち襲う時、舌が喜ばしくない味を味わうと、顔はしかめっつらになり、瞋が生じる；喜ばしい味を味わう時、笑顔になり、貪が生じる。

睡眠の時以外、我々の六根は、刻々開放されている。目は毎日何かを見ているし、耳は毎日何かを聞いているし、鼻は毎日何かを嗅いでいるし、舌は毎日何かを味わっているし、身体は毎日何かに触れているし、意識は毎日何かを考えている。それらは毎日、それらは、毎日、六人の強盗と一緒にいて、毎日強盗に襲われているようなものである。故に、我々は、毎日の一刹那毎に、目がものを見る一刹那、耳が音を聞く一刹那・・・、いつも業を造っているのである。業がひとたび造られると、業力が残される。業力は、熟すと次に輪廻を誘発する。

では、六人の強盗が、我々の目、耳、鼻、舌、身体と意を襲わないようにするには、どのようにすれば良いのか？
では、どうやって守るのか？
目を閉じたり、耳を塞いだり、鼻をつまんだりするのだろうか？
根門を守るということの意味は、我々は、我々の心をいかなるときにおいても、禅の修行の目標の上に置く、たとえば、呼吸などに、ということを意味する。このようにすれば、目は、いつもキョロキョロすることがなく、男性は、美しい女性を見ても、精神が顛倒することがなく、色々考えることがない。というのも、あなたの心は、呼吸の上にとどまっているが故に。このようにすれば、貪が生じることはない。

人があなたを罵倒するとき、あなたの心が呼吸の上にあるならば、あなたは何を言われているのか、曖昧模糊となり、故にあなたに怒りの心が起こることはない。もし、あなたの心が出入息の上に安らいでいるならば、食べ物がおいしくても、まずくても、特にどういうこともなく、故に、あなたの舌が何かを味わっても、貪も怒りも生じることがない。このように、根門を守ることは、心を守ることなのである。

《願以此功徳　正法久住世間　早日証涅槃》
今、私は、法所縁について説明する。所縁は六種類ある。すなわち；
１、五浄色：眼、耳、鼻、舌、身体。
２、１６細色
３、心：一つの貪根心は、もうひつと別の貪根心の縁生法になりえる。たとえば、以前の貪を思い出して、今の貪が生じるなど。

[前の貪根心は縁法であり、現在の貪根心は、縁生法である。どのような縁力か？所縁縁の中の法所縁である]
４、心所
５、涅槃；涅槃とは、出世間道心と果心の所縁である。
四種類の道心；ソータパナ道心、サターガミ道心、アナーガミ道心、阿羅漢道心。
四種類の果心；ソータパナ果心、サターガミ果心、アナーガミ果心、阿羅漢果心。
[四道心と四果心は、みな、涅槃を所縁とする。四つの道心と四つの果心は、縁生法で、涅槃は縁法。縁力は所縁縁。]

６、施設；すなわち概念。例えば、。家屋、部屋、海洋など等。すなわち、いわゆる世間諦（＝世間的な、俗的な真理）である。概念はすべて世俗諦に属している。それは我々が修習する所の出入息、禅相等々を含む。我々が安般念を修する時、深い定により、鼻孔の下に光のような似相が生じる。この禅相が安定する時、長い時間に亘って、善心を引き付け止めることができる、一時間、二時間・・・そして、その後に初禅に入ることができる。安般念の似相は、同時に、二禅、三禅、四禅の縁法でもある。
【ここにおいて、この似相という概念は、縁法であり、その縁生法はジャーナ心、縁力は所縁縁である。】
所縁縁と因・縁は、密接な関係がある。というのも、所縁縁の出現は、貪、瞋恚、痴または無貪・無瞋・無痴を生じせしめるが故に。たとえば、一人の人間が、金銀財宝を見た時、それを擁したいという（貪）の心が生起する；この人が、嫌いな人を見る時、嫌悪（瞋）の心が生じる、など等である。衆生の心は、常に絶え間なく、外部にある六所縁を追い求め、それらを追い求める事において、熱狂的となる。その原因は、彼らは、未だ外境が心霊（＝心）を打つ事から遠く離れた時の、真実の平静と楽しさを経験した事がないからである。

３、増上縁（Adhipatipaccayo）

増上縁には二種類ある。すなわち、
「所縁増上」（ārammaṇādhipati）；と
「俱生増上」（sahajātādhipati）である。
増上縁は、転輪聖王に例えられる。転輪聖王は、全世界を統治しているが、増上縁もまた、すべての心、心所及び色法を統御しているからである。

一、所縁増上縁

この縁は、縁法の所縁として、それを目標として取る名法（心と心所を含む）を支配する。ただ極めて尊敬する、愛するまたは渇望する所縁においてのみ、この縁の縁法となりえる。言い換えれば、通常に見られる所の、または聞かれる所の所縁ではなく、特別貴重な、特別に尊敬される、または特別に渇望される所縁である。

たとえば、ある人が、一人の偶像である所の俳優を崇拝しているとする。この偶像である所の俳優は、彼の所縁増上縁になり、それはこの俳優を目標とする貪根心と相応心所を支配する。というのも、この俳優を崇拝する事によって、彼に対して非常に強烈な執着を生起させるからである。彼の心は、ただ俳優をのみ見ているが、これを所縁増上縁と言う。所縁増上縁は、善である時もあれば、不善である時もある。

昔、Korabya 国に一人の国王がいて、彼はサイコロ賭博が好きであった。ある日、龍宮の　Vimala　Devī（離垢皇后）が突然、Vidhura の心（＝心臓）を食べたいと思った。Vidhura は、Korabya 王の智臣であった。彼女の娘であるイランダーティ王女は、それを知って後、母親の希望を叶えてあげることにし、こう思った：
「私は、母親が渇望の余り、死ぬのを望まない。」
そして、彼女は母親に、彼女が必ず　Vidhura の心を取って来て、母親に食べさせてあげるので、安心するようにと、言った。
【ここにおいて、イランダーティ王女の、Vidhura の心を取って母親に食べさせるという決意は、痴因縁である】。

イランダーティは、王宮を出て、Yugandhara 山の山頂まで行った。そして、ブランコに乗りながら、美しい歌声で歌を歌った。大力魔王　Puṇṇaka が、ちょうどそこを通りかかり、その歌声に引く付けられた。彼は、歌を歌っている人の顔を見たいと思って、前に進んだ。そして、一目見ると瞬く間に恋に落ち、彼女の愛を示した。
【ここにおいて、悪魔 Puṇṇaka が、歌声に引き付けられたのは所縁縁でる。王女イラダーティの容姿は、彼の貪因を誘発する所縁増上縁である。】

王女は以下のように応じた。もし、彼が　Korabya 王の智臣である　Vidhura の心（＝心臓）を取ってくる事ができたならば、彼女は彼の愛を受け入れるであろう、と。Pnṅṅaka は、必ずや彼女の欲しがっているものを手に入れて来る、と約束した。悪魔 Puṇṇaka は、Kaccañña　という名の青年に化け、赤く輝く一粒のルビーを持って駿馬に乗り、Korabya　の王宮に行った。彼は夜昼構わず駿馬を走らせたので、瞬く間に Korabya の城門の前に来た。彼は（＋捉まえられて）国王の前に連れてこられ、国王は彼の来城の目的を尋ねた。青年である　Kaccañña は、彼は、国王と骰子賭博がした

いのだ、と言った。国王は、彼にいくら賭金を持って来たのかと尋ねると、青年は珍しい一粒のルビーと駿馬一頭をもって、賭けに来たのだと答えた。彼のルビーは、王宮を二座以上買える価値があり、駿馬の価値ときたら、国王が己自身の目で確認するしかない、と答えた。次に、彼は駿馬の背に跨り、手にルビーを持って、国王の目の前で、飛ぶように走り回ったが、手に持つルビーの光る様子が、まるで人が、燃える松明を持って駆け巡っているように見えた。このような信じがたいパフォーマンスを見た国王は、大いに喜び、青年の持って来た二つの品物を、早く手に入れたいと渇望した。
【ここにおいて、国王が奇妙なルビーと駿馬に引き付けられたのは所縁増上縁によって貪因が誘発された為である。】

骰子賭博をする前に、Kaccañña　は国王に言った：
「大王！もし私が負けたならば、私はすでに、私の二つの宝物を差し上げる準備をしてあります。もし、大王が負けたならば、何をくださいますか？」
国王：
「私自身と皇后以外、私が持っているものの中から、あなたが好きなものを持って行けばよろしい。」
こうして、彼らは骰子賭博を始めた。一回目は、国王が勝ち、二回目と三回目は青年の Kaccañña が勝った。

青年は国王に言う：
「大王！私は三回の内、二回勝ちました。あなたは私に欲しい物をくれると言いました。では、あなたの智臣である　Vidhura の心（＝心臓）を下さい！」
国王は仕方なく、智臣　Vidhura を差し出すよりなかった。Vidhura は、一人ごちた：
「ああ、国王よ！あなたはなんと愚かなのか！　なんと恥知らずなのか！　人々はあなたを何度となく、責めるでしょう。　あなたは、私のような智慧のある人を捨てて、あなたの敵の手に渡すなんて！　あなたは、あの青年の特徴を見抜けなかった。彼は人類ではなくて、人間でないものが、姿を変えて、化けたものなのに。私は一目で気が付いた。彼の足には踵がない。一度も瞬きをしない。影がない。これらは皆、人間でない証拠です。私自身は、敵人の手に渡っても、なんとも思わないが、国王は己自身の愚かさにおいて、恥を知るでしょう！」

そう言った後、傷心の　Vidhura は、Kaccañña を連れて、家に帰った。家に戻った Vidhura は、家族全員を集めて、彼らに説法をした：
「あなた方は、善を行い、悪を避けなさい。五戒を守り、世間のすべての衆生に向かって、毎日、慈心（metta）を散布しなさい。」
この時、Kaccañña の心の内に迷いが生じた：

「ああ、Vidhura は品徳が善良である。もし私が彼を殺して、彼の心臓を抉り出したならば、私は重大な罪行をなした事になる。もし、私が彼の心臓を取らないならば、私は私のイランダーティを失う。私は必ずや彼の心臓を取ろう。しかし、私自らの手で彼を殺さない。私の駿馬でもって彼を殺そう！」

この時、Kaccañña の貪欲は、彼が悪をなす為の駆動力となった。その後に、貪愛によって征服された Kaccañña は、Vidhura を高座から引きずりおろして、彼の手足を縛り、彼に対して粗暴に対応した。彼は Vidhura を馬に尾に縛り付け、言った：
「Vidhura、私はお前を馬に縛り付けた。これから私は、馬に乗ってお前を馬で引きずる。あなたは自分の為に祈りなさい。私はヤルぞ！」
彼はこのように言うと、馬を走らせて山に登った。この山は一由旬の高さがあった。幸いなことに、Vidhura は山林を守護する神祇の保護を受けて、少しでも頭が痛くなるような事はなかった。粗暴に走り回った後、Kaccañña は、馬を止めて、振り返って聞いた：
「Vidhura よ、まだ生きているか？」
Vidhura：
「おお、生きているとも！」
「お前の身体には、護身符でもあるのか？」
「そんなものは、ない」
「それなら、お前は何を持っている？」
「私が持っているのは、聖者の七つの性質だ」

Kaccañña は、Vidhura の死を願って、二度、三度と馬を走らせたが、三度とも効果はなかった。
彼は思う：
「Vidhura は護身符を持っていないと言う。超能力もない。しかし、善良な人の持つ七つの性質を持っていると言う。これでは彼に勝てないかもしれない。それなら、私は彼を脅して死なせよう！」
そして、彼は馬から降りて、Vidhura を馬の尾から解いて、言った：
「Vidhura！私はお前を、深い谷に突き落とす！」
Vidhura は落ち着いて答えた：
「私を脅せると思うなよ。それは妄想だ。お若いの、私はお前を恐れない！」
Kaccañña は思った：
「この方法は役に立たない。彼は、自分が少しばかり脅しているだけだ、という事を見透かしている。」

次に Kaccañña は、悪魔の姿に戻り、手に大きな棒を持ち、Vidhura の頭を打ち砕こうとした。
Vidhura は言う：
「私はお前を恐れない！」
Kaccañña は思った：
「彼は俺の本性を知っている。」

こうして、彼はまた、一匹の悪龍（nāga）に変身し、Vidhura を七巻して、彼の頭を攻撃する振りをした。
Vidhura は、恐れを示さず、言った：
「お若いの。もう私を脅すのは止めなさい。私は何があっても、恐れないのだから！お前は、人間の若者に変身して、名を Kaccaṇṇa と名乗った。しかし、私はお前の本当の姿を知っている。お前は力のある悪魔で、その名は Puṇṇaka だ！」

年若い Kaccañña は、またも見破られた為に、攻撃を放棄するしかなかった。彼は Vidhura に問うた：
「Vidhura よ。お前は身体に護身符をつけていない、と言う。超能力もない。しかし、お前は聖者の七つの性質をもっていると言う。お前は私に、聖者の七つの特質とは何かを、話してくれないか？」
Vidhura は言う：
「お若いの！お前には戒（sīla）がない。定（samādhi）がないし、慧（paññā）もない。お前は王女イランダーティ恋慕した事によって、無明が（＋心）を覆い被した。そのために、戒にも、定にも、慧にも触れることが出来なくなった。お前が王女の美貌に深く迷えば迷う程、（＋心は）欲楽の渦に巻き込まれており、故に、お前は、私から、聖者の七つの性質を聞き出す資格がない。しかし、もし、お若いの。お前が私を高い所に座らせて、お前が低い所に座って、跪いて私に説法を乞うならば、私はお前に説いてやろう」
Kaccañña：
「分かりました！先生！　あなたは、この布の上に、座って下さい。」
彼は己の服を折りたたんで、丘の上に置き、己は地面に跪いて、恭しく、己の希望を述べた。こうして、Vidhura は説法を開始した：
「その七つの聖者の性質とは、
信念（saddhā）、
持戒（sīla）、
多聞（suta）、
布施（cāga）、

智慧（paññā）、
慙（hiri）、
愧（ottappa）である。」

年若い Kaccañña は、急いで言った：
「おっと！Vidhura！七種類も、説明しなくてもよい。私は、最初の＜信念＞というものさえ、理解できない。先にその意味を説明してくれ。」
Vidhura は言う：
「信念とは、因果業報の理を深く信じる事だ。お前は、覚えているか？　お前が私を、馬の尻尾に結わえ付けて、馬を走らせて、私を殺そうとし、そして、その後に、馬を止めて私に聞いた：『まだ生きているか？』
私は答えた：『私は、いまだ元気に生きている』と。
私が死なないのは、因果業報の故にであり、この生において、業報がいまだ尽きないならば、お前が私を殺そうとしても、私は死にはしない。私は、何時の日にかは、死ぬであろうが、それは今ではない。愚者は、生があれば、必ず、老、病、死等の自然現象がある事を知らない。故に、愚者は、争いを止める事ができず、恨みを持ち続け、将来においても、争いを続けるのだ。智者は、生があれば、老、病、死などの自然現象がある事を知っており、故に争わず、争いから遠く離れ、将来においても、争いに巻き込まれる事がない。これが＜信念＞の意味である。」

「持戒って何だ？」
「持戒とは、他人を侵犯しない行為である。お前が私を、馬の尻尾に結わえ付け、手足を縛り、粗暴に私に対応した時、私はお前を、罵っただろうか？　私は完全に、お前に対して、悪口をもって攻撃などしなかった。私の身業はどうであったか？　私はお前を打たなかったし、逃げようともがく事もしなかった。私の口業と身業は、ともに、攻撃性をもたない。私の心の中には、お前を挑発したい、攻撃したい、などという思いがない。このように、身口意において、行為をコントロール（制御）するのを、持戒と言うのだ。」

「多聞を教えてくれ！」
「多聞とは、学識が深く、法義を熟知している事だ。お前が馬を粗暴に走らせて、私を殺そうとした時、お前が聞いていたのは、馬の蹄の音だが、しかし、私には、そういう音は聞こえなかった。私はただ、心の中の法音を聞いていた。私の内心は、不断に、私は老いる、私は病む、私は死ぬ―という如理作意をしていた。これが多聞の意味だ。」

「布施ってなんだ！」
「布施とは、気前よく捨を施すという意味だ。私は物心がついて以来、己を捨ててすべての衆生に捧げると言う信念を抱いていた。誰が私を罵っても、傷つけても、あまつさえ殺しても、私はすでに己の生命を捨て去って、他人の願望に沿う準備は出来ている。これが布施の意味だ。」

「智慧とはなんだ！」
「智慧とは、因縁法と諸行の無常・苦・無我の本質を洞察する事だ。お前が私を、馬の尻尾から解き放した後、お前は私を、谷底へ突き落すと脅した。その時、私はお前に何と言った？　私はこう言った：『私を脅せるなどと、妄想するな。私は何も恐れないのだから！』と。これは無我を知っている所の智慧だ；その後にお前は悪魔に、また悪龍に変身して、私を脅して攻撃しようとしたが、私はそれでも恐れなかった。それは因縁法と、無我を知っている所の智慧だ。」
「森の中に、我々二人しかいない。何時如何なる時でも、お前の心境や、心情に変化があったならば、お前の顔色もそれに従って変化する。それを私は察知することができる。これは観察の智慧だ。」

「慙ってなんだ！」
「慙とは、悪事を働く事に恥を知ることだ。お前が私の家で、私を高座から引きずり下ろして、私の手足を縛り、私に粗暴に対応した、私を馬の尻尾に縛り付けたが、あのような粗暴なふるまいをするのは、恥ずかしいものだ。しかし、お前はそれらの事柄に、何等の羞恥も感じない。少なくとも私は、あのような行為に対して、非常なる羞恥を感じる。これが、お前が、慙を欠いているという説明だ。」

「愧とはなんだ！」
「愧とは、悪をした後に、果報が来る事を恐れる事だ。お前は私を粗暴にも、馬の尻尾に縛り付けて、あちこち駆け回り、その後に、私を谷に突き落とすと脅した。お前は貪愛と我慢（māna。高慢の事）に惑わされたが、この二種類の力は、悪魔のようにお前をコントロールしている。その為、お前は進んで私の手足を縛り、私に暴力をふるったが、お前が、これら悪魔のような仕業をなしてもなお、果報を恐れないのは、お前の心が、イランダーティーに傾いており、王女に恋慕・執着し、魂（＝心）が引きずられているからなのだよ！
仏陀は言う：
『愛の縁により、取が生起する；取の縁により、有が生起する。有の縁により、生が生起する。生の縁により、老死愁悲苦憂悩が生起する』と。

『有』とは、お前が今現在なしている所の、各種の悪業であり、それは新しい生命の生起を誘発する。
『有の縁により、生あり』生は恐ろしいものだ。というのも、生は、老、病、死とそれに随伴する所の憂、悲、苦悩、失望などを齎すが故に。私は悪をなす事によって、齎される苦の果報が恐ろしい。このような、悪を為す事によって、苦の果報が齎されるのを恐れるのを、愧と言のだ。」

説明を聞いた後、悪魔 Puṇṇaka は、慙愧を覚え、己の悪行を悔いた。
彼は言う：
「おお！Vidhura！　私はあなたを傷つけようとしただけでなく、その前に身口意においても、悪行がありました。どうかお許し下さい。私の馬の背に乗って下さい。私があなたを、あなたの国までお送りします。」
【ここにおいて、Vidhura の法語（所縁増上縁）は、Puṇṇaka の無貪と無痴の因と縁になった】

善き所縁増上縁に関しては、尊い仏陀の例を挙げることができる。敬虔な仏教徒から言えば、彼が仏の九種類の功徳を誦している時、心中に、強烈な尊敬の念が生じるが、この時、仏の功徳が、彼の所縁増上縁であり、それはそれを目標に取る心、心所と色法を支配し、心をして、尊敬の念を充満せしめ、身体は軽安で柔軟になり、天空に舞い上がる事すらあるのである。随分前の事であるが、スリランカのある一人の婦人が懐妊した。行動が不便なので、父母は家に残って留守番をするようにいい、彼らだけで、満月の日にお寺に行って、金塔を礼拝しようとした。失望の余り、彼女は二階のベランダに上がり、遠くに光る金塔を凝視しながら、心中に仏陀の徳行を観想していた所、その時、そのあまりの強烈な喜楽によって、彼女の身体は浮き上がり、金塔まで漂って行った。その時、彼女は父母より早く、金塔に到着した！　これは、善の所縁増上縁である。

二、俱生増上縁
この縁においては、縁法が縁生法を支配し、それ（＝俱生増上縁）と共に生起する。この縁の縁法は、四つの神足である：欲神足、精進神足、心神足と慧（観）神足である。どのような時においても、それらの内の一つが増上縁になり得るが、また、それは、速行心においてのみ発生する。その中の一つが生起するやいなや、それは増上縁の力によって、その俱生の名色法を支える。俱生の名色法は、縁生法である。

１、欲俱生増上縁
「欲神足」が生起する時、それと同時に生起する名色法を、縁生法と言う。それでは、縁力は何か？　俱生増上縁が縁力である。

以下に説明を加える。仏陀の時代、名を護国（Raṭṭhapala）と言う所の、ある一人の裕福な家庭の婆羅門がいた。ある日、彼は、仏陀の以下のような開示を聞いた：
「世間的な欲楽への追求を手放す事によってのみ、世間を超越する所の解脱と真正なる楽しさを齎すことができる。」

この時、彼に、出家したいと言う強力な欲（chanda）が生じ、故に、父母に対して、出家を許して貰うよう乞うた。しかし、彼は一人っ子だった為、父母は同意しなかった。その為、彼は断食をして、己の決意を表明した。母は困って、彼の友人を呼んできて、彼に出家したいという希望を放棄して、世間的な栄華を享受するよう、説得してもらった。しかし、護国は彼の友人に言った：
「もし、私の父母が、私の出家を認めるならば、もしかして、父母は、私に会う機会を得るかもしれない。しかし、出家を許さないのであれば、私はもう死ぬだけだ。彼らは、私が死ぬのを見たいのか？それとも私を出家させるのか？出家しても、私は（＋時々）家に帰って、父母に会う事はできる。」

父母はそれを聞いて、彼を出家させた。欲神足が生起する時、護国の俱生名色法はコントロールされる。彼は、一死をもって、出家の決意を表明する事ができたが、これを俱生増上縁と言う。上記の事柄は、欲俱生増上縁の威力を表しているものであり、それが生起しさえすれば、その他の名色法もまた、それと同時に生起して、それが達成しようとする目標に向かって前進するのである。

２、精進俱生増上縁
《本生経》の中で、ある一人の菩薩の物語は、「精進神足」の説明に該当する。ある時、菩薩は大勢の人々と、船に乗って遠くへ出かけたが、その途中、船は暴風雨に出会い、あっという間に沈没しそうになった。船上の人々は、死ぬのを恐れて泣き叫んだ。菩薩は思った：
「泣いても意味がない。私は普通の平凡な人間ではない。私は私の精進力で、己自身を救わねばならない。」

船が沈没した後、彼は精進力でもって、大海の中の七日七夜、泳いだ。海神は、菩薩のこのような精進を見て、大いに感動し、神通力でもって、菩薩を救い上げた。精進神足が生起する時、達成できないものは、ない。それは同時に、その他の俱生の名色法を総べ、それと同時に前進するようにする。それは、たとえ火の中、水の中であっても、後退する事がない。

３、心俱生増上縁

「心神足」とは、普通の心の事を言うのではなく、それは目標に対して、非常に打ち込み、寝食を忘れるほどのレベルの事を言う。たとえば、発明家のエジソンは、一生の間、ほとんど実験室の中にいた。妻は心配して、言った：

「あなたは毎日実験室で、苦労されている。どうか、一日休んで、外でゆっくりして下さい。」

エジソンは「そうだね。そうする」と答えたが、次の日起きてみると、妻はエジソンが実験室にいるのを発見した。

「あなたは、今日はお休みだったのではないですか？」

エジソン：

「実験室こそが私のリラックスできる場所なのだ。ここにいるのが、一番楽しいのだ。」

この種の（＋心を）俱生増上縁と言う。心神足が生起するやいなや、その他の俱生名色法を総べ、それと同時に前進せしめるのである。

４、慧俱生増上縁

「慧神足」とは、普通の智慧を言うのではない。一般的に、我々が生・老・病・死を見た時、なんらの感触も持たないが、しかし、シッダッタ王子が生・老・病・死を見た時、心の中に、非常に大きな懼れを感じた。成就された智慧により、彼は考えた：

「死があるのであれば、不死の道もあるに違いない。」

こうして、彼は栄華、富貴の生活を捨て、彼が自由に解脱するのを束縛する所の家庭を捨てて、一人で不死の道を探した。六年間の艱難辛苦の修行の後に、菩薩は最終的に殊勝なる慧神足によって、正等正覚を成就したのである。

我々が、観禅（＝vipassana）の修行をする時、智慧が、名色の無常・苦・無我を観照する。この時、智慧は、俱生増上縁であり、それはその他の俱生心所をして、すべての心所が、無常・苦・無我を観照するように、その方向へ向かわせしめるのである。観の修行の時、観または智慧は、最も顕著な心所となる。この四種類の俱生増上縁（欲、精進、心と慧）は、非常に強大で、かつ（＋全体を）総べる能力を有しているが、それは、ただ速行心においてのみ発生し、その他の心には発生しない。その他の心は、全体を総べる能力がなく、ただ速行心だけが、この力を持つのである。

４、無間縁（Anantarapaccayo）

無間縁とは、縁法に属する名法であって、縁生法の名法の、それが滅尽した後、（＋別の名法を）即刻生起せしめ、その他の名法がそれらの間に差し込まれる事のないようにする、という役割を持つもの。これは、心の定法によって説明することができる。
心の定法――一個の心が生起して、その後に滅し、もう一つ別の心が即刻生起して、その後に滅し、もう一つ別の心が、相続して生起する。これを無間縁と言う。

輪廻の過程において、この一生の生死から、次の生の生死まで、その過程は、常に無間縁であると言える。輪廻の過程を見てみよう。この一生において、我々は、非常に多くの善業を実践した：布施、持戒、聞経、功徳の回向、奉仕など等。
臨終の時、もし、その中の一つの善業が熟したならば、ある種の相が出現する・・・たとえば、我々は、天神の影像（趣相と言う）を見る事があるが、これは、我々が往生する先が、天界である事を意味している。通常の心路過程は、七つの速行心で構成されるが、しかし、臨終速行心は、五つしかない。というのも、その時の心は非常に弱くて、ただ五つの速行心しか、生起する事ができないからである。

有分心は不断に生・滅する。過去有分心が滅すると、有分波動が生起し、有分波動が滅すると、有分断が生起する。有分断が滅すると、臨終心路が生起し、意門転向心は、心をして、天神の影像に向わしめる。天神の影像は、所縁縁（一つ毎の心は、必ず一つの所縁に釘付けになる）である。臨終の五つの速行心もまた、この天神の影像を所縁として取る。二つの彼所縁は、生起する事もあれば、生起しない事もある。その後に、死亡心が生起する。死亡心が滅すると、まったくの間断なく、次の一個の心――結生識または結生心と呼ばれる心が生起する。結生心は、前世と今生をしっかりと結びつける。結生識が滅した後、有分心が生起するが、有分心は合計 16 回、生・滅する。

次に、生命における最初の意門心路過程が生起するが、それは己自身の新しい生命を所縁として、新しい生命に執着する。梵天、天界、人界、鬼道、動物界または地獄等、どこに生まれたとしても、我々は生命の内における、最初の意門心路過程は、この新しい生が、痛苦なものであろうが、楽しいものであろうが、新しい一生に執着を始める。これが、なぜ、貪愛的な生存（有愛）が輪廻の根本であるかと言う理由である。貪愛には三種類ある：欲愛、有愛と無有愛である。有愛とは、生命に執着し、その生命が低いもの、微弱なもの、卑賤なもの、高尚なものに関わらず、それが消滅しないように（＋と願う）。有愛を取り除くのは、非常に困難である。

一つ目の意門心路過程の後は、続いて有分で、次に二番目の意門心路過程、次に有分で、続いて、三番目の意門心路過程・・・心路は、このようにして、この期の生命が終わりを宣告する所の死亡心まで延々と続く。死亡心が生起して、その後に滅する間、中間に間断というのがなく、密着して次の心・・・結生識が生起して、また新しい一つの世が始まる。こうしたことから、生死輪廻は、ただ心の生・滅の流れに過ぎない（＋事が分かる）。この種の心の生・滅は、その合間に間断がなく、故に無間縁と言う。

５、等無間縁（samanantarapaccayo）

等無間縁は、無間縁と同じである。まったく同じであるのに、なぜ同じことを重複するのか？　　仏陀は経を説明する時、衆生の好みに合わせる事が多い。たとえば、心（citta）、意（mano）、識（viññāṇa）は、みな同じ意味であり、パーリ語でも同じ意味である。ある時、あなたが識と言っても、聴衆が分からないならば、心と言い換えてみる。衆生が更によく理解できるように、仏陀は時々、異なった名詞でもって、同じ意味の事柄を説明したのである。ちょうど、等無間縁と無間縁のように。

６、俱生縁（Sahajātapaccayo）

この縁は、縁法が生じる時に、縁生法をして、それ（＝縁法）と同時に生起せしめる縁である。これは、灯火を比喩として述べることができる。灯の灯がついた時、それ（灯）は光線、色彩及び熱を誘発し、それ（灯）はそれと共に、それらをば、同時に生起せしめる。

一、名と名（心と心所）

心王（縁法）の生起は、心所（縁生法）を帯動するが、それは、俱生縁の縁力を借りて、それ（心王）と共に生起するのである。心王と心所は同時に生起し、同時に滅するが、また、（＋対象は）同一の所縁であり、依処も同一である。心所の四つの特性は、心と同時に生じ、心と同時に滅し、心と同じ目標を縁に取り、かつ、心と同じ依処を擁する事である。どのように理解すればよいのか？　舌門心路過程を例に、以下に説明する。

舌は、味を所縁として取る。味が、舌浄色（舌根）を撃つとき、舌識が生起する。

舌識の生起は、所縁縁を通して、（＋生起するの）である。舌識は、心王はであり、心王は、必ず心所と一緒に生起する。舌識が生起する時、7 つの心所が同時に生起するが、それらは：

触（phassa）、
受（vedana）、
想（saññā）、
思（cetana）、
一境性（ekaggatā）、
命根（jīvitindriyaṁ）、
作意（manasikāra）である。

これら、心王と同時に生起する心所は、俱生縁を通して、生起するのである。舌識が滅すると、この７つの心所も同時に滅するが、それを、同時滅と言う；それらは、同じ一つの目標を縁に取るが、舌識は味を目標として、それを縁に取り、相応する７つの心所もまた、同一の味を目標として、それを縁に取る；それらは皆、舌浄色を依処としている。

二、色と色

我々の身体は、四大一地・水・火・風から成り立っている。地・水・火・風は相互に支え合い、かつ、同時に生起する。それらは、どのようにして、お互いに支え合っているのか？　　たとえば、地は、他の三つの立脚点であり、水・火・風は、地に立脚して、初めて生起することができる；水は、地・水・風の三つを凝集せしめるが、もし、この凝集力がないならば、地、火、風の三つは、散り散りになってしまう；火は、地・水・風の関係性を維持しており、もし、火によってこれらの関係性が維持されないならば、身体は腐乱する；風は、その他の三つの色法を支えているが、もし、風の支えがなければ、身体全体は、崩れて、立ち上がる事もできなくなってしまうし、手足を伸縮する事もできなくなる。

このように、地・水・火・風の四者は、相互に支え合っているのであり、俱生縁によって、同時に生起しているのである。もし、地界を縁法とするならば、その縁生法は、水・火・風界であり；もし、火界が縁法であれば、その縁生法は、地・水・風界であり；その他は類推することができる。どのような縁力によるのであるのか？　俱生縁である。

三、名と色

五蘊の有情が結生する時、名法と色法は、相互に支持し合って、同時に生起する。ここにおいて、縁法が名であれば、縁生法は、色である；反対も又然りであり、もし、縁法が色であれば、縁生法は名である。人類について言えば、ここで言う名法とは、結生識とそれに相応する心所の事である。

結生識が生起する時、30 個の色法もまた、それと同時に生起するが、それは、それぞれ、性根 10 法聚、身 10 法聚と心所依処 10 法聚である。もし、結生識と相応する心所が縁法であれば、縁生法は、30 個の俱生色法であり、縁力は俱生縁である；もし、結生色法が縁法であるならば、縁生法は、結生名法であり、縁力は俱生縁である。

四、心、心所と心生色

例えば、我々の心の中に、嫌いな人・敵の事を思い浮かべると、瞋恚と恨みの心と、それに相応する心所の作用によって、顔色はすぐに黒くなってしまう。嫌いな人を思う事（瞋恚の心とその心所）は縁法であり、顔色が黒くなる（心生色法）のは、縁生法である。どのような縁力を通してか？　　俱生縁である。

五、四大種色と所造色

身体は、四大（地水火風）によって構成されている。この四大に依存して、次の四つの所造色――色彩、香、味、食素（＝栄養素）が造りだされる。この八つの色法は、色聚を構成し、八不離色と呼ばれる。この八個の色法は、一粒づつの色聚の基本的な構造となる。食素は、我々が食べた食物の栄養素である。一つひとつの色聚には、皆色彩、匂い、味があるが、たとえば、血の色は赤であり、歯の匂いは臭く；胃は酸っぱい、等である。この四大種色が生起する時、この四つの所造色は、それらと共に生起する。ここにおいて、縁法は四大で、縁生法は所造色であると言えるが、では、それらは、どのような縁力によって生起するのか？　　俱生縁である。

７、相互縁（Aññamaññapaccayo）

相互縁においては、一つひとつの縁法が、縁生法を支援していると同時に、同様の方式において、後者の支援を受けて、縁生法となりえるものがある。これはちょうど三脚のようで、一つひとつの脚は、お互いを支え合っていて、その結果、三脚は立っていられる、という訳である；それはちょうど、僧侶たちと在家衆の、相互に支え合う関係と同じである。

一、名と名（心と心所）

心が生起しない時、心所も生起しない；
心所が生起しない時、心もまた生起しない。
それらは相互に支え合うが、これを相互縁と言う。

二、色と色（四大）

地・水・火・風は同時に生起し、相互に支え合う。地は水・火・風を支えるが、地は水・火・風の立脚点である。水は、凝集する作用でもって、その他の三大を支え、火は、維持する力を通して、その他の三大を支え、風は、支持・維持する（＝身体が倒れないように支える等）力でもって、その他の三大を支えている。四大は、お互いに助け合い、支え合い、共同で作用する。

三、名と色

結生識は、我々が出生する時の、第一番目の心識である。一つひとつの心は、一個の住処が必要である。例えば、家は、我々の住処であるように、心もまた、住処――心所依処を必要とする。アビダンマでは、合計 89 種の心があると言う。五個の根識（眼識、耳識、鼻識、舌識と身識）以外の、その他の心の住処は、心所依処である。心所依処は、心臓の血液の中に位置している。唯一、無色界の有情だけは、色法がない為、心所依処もない。結生の時、心と心所は相互に支え合う為、相互縁と言う：同時に俱生する為、俱生縁とも言う。

８、依止縁（Nissayapaccayo）

縁法は、縁生法の生起を支援する。当該の縁法と縁生法の相互の関係性は、大地が植物を支える関係とよく似ている。；また、我々が呼吸に完全に専注する時、禅相（＝nimitta）が出現するが、禅相は深い定力に依止しているのである；また、ソータパナ道果を証悟する時、以下の四つの条件に依止する。

１、善知識に親しむ。
２、仏法を聞く。
３、如理作意において、無常・苦・無我と不浄を行法とする。
４、法随法行。

依止縁と俱生縁の五つの項目は、内容が非常に似ているが、しかし、作用は異なる。

一、名と名

四つの名蘊・・・受・想・行・識を例にとる。受は、単独では生起できない。
それは想・行・識に依止して、初めて生起することができる。この種の関係性を、依止縁と言う。それらの間の（＋関係性）は同時に、俱生縁と相互縁でもある。

二、色と色

　四大の内の一つと、その他の三大との関係を例にとる：

地は、水・火・風に依止して、初めて生起することができる；

水は、地・火・風に依止して、初めて生起することができる；

火は、地・水・風に依止して、初めて生起することができる。

それらの関係性を依止縁と言う。我々の身体は四大によって構成されており、四大は相互に依止し合っている。身体は地界を基礎にして、水界によって結合され、火界によって維持され、風界によって移動する。

三、名と色

　結生の時、一番目の心識（結生識）（＝一番最初に生起する心識）は、必ず心所依処に依止して、初めて生起することができる。もし、心所依処がなければ、心は生起する事ができない。それらの関係性を依止縁という。

五根識を例にとると：

眼識は、眼浄色に依止して生起する；

耳識は、耳浄色に依止して生起する；

鼻識は、鼻浄色に依止して生起する；

舌識は、舌浄色に依止して生起する；

身識は、身浄色に依止して生起する。

根識と、それの相応する依処との関係性も、また依止縁である。

四、心と業生色

　心所の依処（＝依存する場所）は、業生色である。というのも、心所依処の生起は、過去の業によって造られるが故に。我々の心は、心所依処に依存して初めて、生起することができる。これは依止縁である。

五、四大種色と所造色

　四大（地・水・火・風）は、所造色（色彩、香、味、食素）に依存して、初めて生起することができる。それらは（＋合わせて）八不離色である；四つの所造色もまた、四大に依存して、初めて生起することができる；この種の関係性は、依止縁である。

■人類と大地の相互依止

　我々は、この大地において生活しているが、やはり相互に依止（＝依存）しているのである。我々は、大地に依って生産された農作物に依存して生活しており、大地はまた、我々の大地への維持・保護活動によって、存在している。もし、我々がこの大地を破壊し続け、最終的に、この大地が壊滅したならば、我々は、大地と共に滅亡するであろう。

仏教によると、もし、衆生の貪・瞋・痴がますます強くなるならば、大地全体は、よくない磁場の影響を受ける事になるが、それは天空の星々、太陽系の位置・位相なども含まれる。我々が発散する所の、たとえば、貪・瞋・痴による邪気は、宇宙全体を破壊しているのである；もし、（＋我々が発するのが）不貪・不瞋・不痴の正気であるならば、我々は、宇宙のバランスを保っている事になる。

しかし、不幸な事に、現時点での衆生は、貪・瞋・痴が強く、無貪・無瞋・無痴が弱い。その為、宇宙全体はすでに破壊されて、気息奄々の状態なのである。我々は、以下の事を理解しなければならない。己自身の健康の為に、宇宙全体の天災と人的被害を避けるために、我々は必ずや大いに、無貪・無瞋・無痴の善心を、育成しなければならない。これは、道家の主張する正気、邪気と、同じ事である。ただ仏教では「気」という文字を使わないだけなのである。

■善心と健康は相互に依止する

我々の心中に生起する善心と不善心は、みな心生色法を生じせしめる。不善心所によって生じる色法は、我々の健康に（+悪い）影響を与えるが、善心所によって生じる色法は、身体を健康にする。故に、我々の健康は、我々の善心に依止しているのだと言える。これら心生色法の火界は、身体内部または体外において、新しい代の色法を生じせしめることができる。もし、この色法が体外に発散されたならば、周囲の人々に、ポジティブな、良性な影響を与える。これがなぜ、仏陀が慈愛を拡散する時、衆生は仏陀の慈愛によって心が潤わされるのか、という事の答えである。こういうことであるので、あなたは、あなたの心を改善し、善心を育成する必要があるのである。

ある時、仏陀が、ある村に出かけて行った。村の国王（ママ）は、すべての村人に対して、仏陀に会いに行くように、会いに行かない者は罰金を科す、と命じた。王子は、それをあまり快く思わなかったが、彼はアーナンダ尊者の友人であった。アーナンダ尊者は、王子が仏陀に会いに来たのを見て、非常に喜び、王子は仏陀を信頼しているのだと思った。

尊者：

「嬉しいよ。君が仏陀に信頼を寄せるなんて」

王子：

「私は仕方なく来たんだよ。来ないと国王は罰金を取ると言うのだもの。本当は来たくなかったんだ。」

尊者はそれを聞いて、王子を手助けしたいと思い、仏陀に言った：

「世尊、私の友人に慈愛を送ってはくれませんか？彼の気持ちが変わるように。」

仏陀は同意して、その日すぐに、王子に慈愛を送り、彼の平安、幸福、心身の痛苦からの解放を祈った。王子は即刻、それを感じ取って、仏陀の側に行きたくなった。彼は母鳥を亡くした小鳥のように、急いで仏陀に会いに行った。彼は仏陀の住まい・・・クテッィに行き、仏陀に礼拝した。仏陀は、仏法を聞き、受け入れる時期が熟したと知って、彼に法を説いて、彼の心に仏法への信頼・確信を得させしめた。

９、親依止縁（Upanissayapaccayo）

　これは、非常に重要な縁である。三種類の親依止縁がある。
一、所縁親依止縁（ārammaṇūpanissaya）
二、無間親依止縁（anantarūpanissaya）
三、自然親依止縁（pakatūpanissaya）

所縁親依止縁と無間親依止縁は、所縁増上縁及び無間縁に似ている。
（＋故に）我々は、自然親依止縁について、重点的に説明する。

自然依止縁
　この縁の波及するレベルは非常に広く、その縁法は、一切の過去、現在、未来における名色法、涅槃と概念が含まれる。それらは、縁生法に属する所の、心と心所を、有効的に生起せしめる。縁法は、一切の、過去、現在、未来における名色法、涅槃と概念である。それが生起せしめる所の、現在名法（心と心所）は、縁生法である。たとえば、以前の貪欲（名法）は、現在の殺生、偸盗、邪淫等の思（動機）を構成し得る所の、自然親依止縁である。以前の信心（名法）は、現在の布施、持戒、禅修等の思（動機）を構成し得る所の、自然親依止縁である。

　健康は、楽しさと精進の親依止縁である。我々が健康な時、楽しくなるのは容易であり、仕事や禅の修行に、邁進する事もできる。病気は、愁い・苦しみと怠惰の親依止縁である。我々が病に倒れる時、不愉快であり、憂いと愁いがあり、身体は精力に欠けて、

仕事ができない。自然親依止縁の範囲は非常に広く、快適な気候、食物、善知識、住まいを含み、また、過去、現在、未来、内、外、など等も含む。

■過去

一切の過去の名色法は、皆、我々の、現在の自然親依止縁になり得る。
たとえば、すでに 2600 年余の歴史を持つ仏陀の教えは、現在の我々仏弟子の、悪行をやめて、善行を行う（＋有用な）親依止縁であり、また、我々が持戒、禅修する所の自然親依止縁でもある。
過去の影響が現在に至り、現在における縁起の一つとなり、我々をして、どのようにして悪行をやめ、善行、定の修習、観の修習を実践するかを、指導・帯動するのである。
また、たとえば、孔子の教育は、今日まですでに 2500 年余の歴史を持つが、それは現代においてもなお、華人の内において、伝統的文化を形成している。

人々は、いま尚、孔子の教えに基づいて、どのようにして、先輩を尊敬すればよいか、また、親戚と往来する時の礼節など等（＋の知識）を、知る事ができる。
このように、古代の孔子による儒家の教育は、中華的文化の内において、一種の自然親依止縁となっているのである。
同様に、イエスの教育は、西洋の国家と人民の文化における自然親依止縁である。
一切の科学者の、過去における研究成果――原理、定律など等は、現代科学における研究的実践にとって、自然親依止縁となる。
我々が以前に経験した所の、目で見た所の、耳で聞いた所の、鼻で嗅いだ所の、舌で味わった所の、身体で接触した所の、二日前、二か月前、二年前、前世の、過去世の・・・、長い輪廻の内においてのあれやこれやは、我々にとって、現在の親依止縁となるのである。

たとえば、我々の前世の伴侶は、我々の現在の、一目ぼれする相手としての、親依止縁となる事がある。仏陀の時代、多くの修行者は、たとえば、池に咲く白い蓮の花を見て「白、白、白」と専注するだけで、禅定・・・初禅から四禅までを、得ることができた。
これはどういう事かと言うと、彼の過去における修行の累積（＋が発現）したものなのである。過去の経験は、現在に生きる我々の内において、非常に早くジャーナを得させしめる所の、親依止縁となるのである。これは、また、なぜ仏陀の時代に、多くの比丘と比丘尼が、仏法を聞くだけで悟ったのかという、その理由の説明でもある。というのも、彼らは累劫、累世の内に、ある種のレベルまで修行を済ませていたからである。

彼らはどうしてその（＋遠い昔の）時に、証悟しなかったのか？
その内に一つの理由は、ゴータマ仏に会いたいという発願をしたからである。ちょうど、今回の生で阿羅漢になる事ができる人が、次の尊仏に会いたいが為に、それを放棄する事があるように。もう一つの理由は、（＋ある種の人々は）過去世において、仏陀の上首（＝上席）弟子、大弟子になりたいと、発願したからである。

■未来
我々は皆知っている・・・次の未来仏は弥勒仏である事を。多くの人々は、未来において、弥勒仏に会いたいと願っている。
ある種の人々は言う：
「この世（＝今回の生）で、阿羅漢になりたくない」と。
なぜか？　彼は弥勒仏に会いたか、または、弥勒仏の大弟子になるか、または一般の弟子等になりたい、と思っているのである。その為、阿羅漢になるチャンスを遅らせても、心願成就を、願っているのである。この場合、弥勒仏は、この修行者の未来における自然親依止縁となり、彼の道・果の証悟のチャンスは、未来に引きのばされる事になる。

ある種の人々は、智慧第一の上首弟子になりたいと、発願する。というのも、彼は経典の中において、シャーリープトラ尊者の言動、品徳、修養と智慧を読み取って、一種の敬愛・尊敬心を生じせしめ、己自身もシャーリプトラ尊者と同じように、某仏陀の上首弟子になりたい、と希望するからである。
過去のシャーリプトラ尊者の行為、道徳、修行など等が、この人にとって、未来において、智慧第一の上首弟子になるよう、この種の願いを発願せしめる事になるが、これは未来において、自然親依止縁になるのだと言える。

■現在
現今の仏教界の内で、パオ禅師（＝パオ・セヤドー）によって代表され、指導される所の止・観禅法は、非常に広範囲に（＋世界中に）広がって伝わっている。彼は、安般念だけではなく、十遍、無色禅、四梵住、四護衛禅など等も教える；また、彼の教える観禅（＝vipassana）は、「アビダンマ」と非常に深い関係があり、その結果、非常に多くの仏教徒が、アビダンマの学習を開始している。
それ以前において、アビダンマを学習する人はほとんどいなかった。というのも、それは余りに深過ぎて、多くの人々は、それを学んだとして、何の役に立つのか、理解できなかったからである。その後、皆は理解する事になった；パオ禅師の教えは、アビダンマと密に相関しあっている事・・・故に、人々は、それを学ぶ必要がある事に、気が付いたのである。

パオ禅師に従って禅法の修習をする時、修行者にアビダンマの基礎（＋知識）があれば、その利益は計り知れない。これが、現在の自然親依止縁であり、このような状況の下、今や、多くの人々が、能動的に自ら進んで、アビダンマを学んでいるのである。

■内

禅修によって育成された定力を有する所の心は、殊勝な心生色を生じせしめ、色聚の形式で出現して、全身に遍布する。一粒ごとの色聚には、八個の色法――地・水・火・風、色彩、香、味と食素（＝栄養素）が含まれるが、その内の二つの色法は、光を発する。その一つは色（＝色彩）で、もう一つは火界である。
普通の心生色法の中の色彩は、光る事がない。しかし、定力のある心が生じせしめる所の色法は、光るのである。故に、ある種の禅の修行者は、己自身の身体内部の光を見ることができるが、これが内在する所の、自然親依止縁である。

心生色聚の内の色彩は、身体内部でしか光ることができず、その光は身体を超越する事ができない。しかし、心生色聚の中の火界によって生じる時節生色聚は、体内と体外、その両方において、発光することができる。一個人の定力、ある人は深く、ある人は浅い。もし、ある人の定力が深いならば、定力によって生じた所の光は、教室の端まで届く事になる；定力が更に深い場合、光は更に遠くまで及び、台北全体（＋を照らす）であろう。
たとえば、天眼第一のアヌルッダ（阿那律）尊者は、我々が見えない所の衆生、たとえば、天神などを見る事ができたが、それはなぜであろうか？　　というのも、彼の定力が発散する所の光は、非常に遠くまで届くが故に、彼は、一個の宇宙全体の内における、衆生を見ることができたのである。

定力の深くて強い心は、非常に高度の明るさを生じることができる上に、それは非常に遠くまで届くことができ、我々をして、通常、肉眼では見えない衆生をみる事ができるよう、なさしめるのである。故に、天眼を修行したい修行者は、必ず禅定を修習しなければならない。ちょうど、我々が真っ暗な教室に入った時、何も見えず、懐中電灯を使ったり、または、電燈をつけたりしなければならない状況だとして、これらの光があれば、我々は周囲が見えるようになる、のと同じである。

我々は、天神や地獄の衆生を見ることができない。というのも、我々には、光が欠けているからである。もし、我々が定の修習をして、光を得たならば、この光を借りて、肉眼では見えないものを見ることができるようになる。これを、内在の親依止縁という。

■外

環境、気候等が含まれる。たとえば、英国の気候は比較的陰々としており、何人かの英国在住者が言うには、英国では非常に多くの人がうつ病になるのだ、と。彼らのうつ病は、部分的には、気候の影響を受けているものである。もし、天気が良いなら、気持ちは晴れやかで、もし、天気が陰々としている時、太陽が出ない時、気持ちは非常に憂鬱になる。これは、外部に存在する所の、親依止縁と言う。

また、我々が住む所の環境、もし、我々の住まいの傍にサンガがあれば、我々には、布施、守戒、聴経、聞法、禅修の機会がある事になる。このように、もし、外部の環境において、善知識が存在するならば、我々は、非常に多くの善行を実践することができる。善知識は、我々が善をおこなう時に外在する所の、親依止縁である。同様に、もし、争い多く、殺戮の多い環境にいるのであれば、我々は、非常に容易に、残虐になり得るが、この種の劣悪な環境もまた、我々の悪行の、外在する親依止縁である。

同様に、食物も、我々の健康に影響を与える。己に合う食物を食べた時、身体が健康であるばかりでなく、修行にも利益がある。古代、ある一人の在家の女性が、比丘に食べ物を供養していた。彼女は比丘に、禅修の業処を教えてもらい、修行に精進したので、サターガミ道果を証得するとともに、他心通も獲得した。彼女は、己が供養していた比丘は、阿羅漢に違いないと思っていたが、しかし、彼女が神通で観察した所、比丘たちは、いまだ聖者でない事を知った。彼女は、自分が供養する食物が、適切でない為に、比丘たちの禅の修行に阻害が生じている事を知った。そのため、彼女は比丘たち一人ひとりに合う食べ物を供養するようになり、比丘たちは、この親依止縁によって、聖道を証悟した。

善業は、善業の親依止縁となることができる。たとえば、我々が、以前になした布施などの善業を思い出す時、心中は愉快になり、再び、布施をしたいと思う。これは、我々の、以前の善業が、我々の現在の善業の親依止縁となっている例である。
反対に、たとえば、我々が以前になした不善によって、後悔の心が起こるならば、以前の不善は、現在の不善心（後悔）を生起せしめる所の、親依止縁となる。善法はまた、不善法の親依止縁となることもありえる。

たとえば、常に、度々、大布施をする人が傲慢になって、布施の少ない人を馬鹿にする、など；持戒が清浄な人が、持戒が不清浄な人を軽蔑する、など；
説法に長けている法師が、説法が苦手な僧人を軽視する、など；
定のある修行者が、修行に精進していながら、定を得ることのできない修行者を見下げる、など。

しかし、ある時には、以前の不善業が現在の善業の親依止縁になる事もある。
たとえば、悪魔のような殺人鬼であったアングリマーラ（Aṅgulimāla）（＋の例）である。
アングリマーラは、元々は非常に優秀な学生であったが、他の学生の嫉妬にあって、アングリマーラが先生を殺す計画を立てている、と密告されてしまう。先生は、深く考えずに、これを信じてしまい、何か策を講じて、彼を罰しようとした。当時のインドの伝統では、学生は卒業する時に、教師に何かのプレゼントをしなければならない。教師は、アングリマーラに、自分に何をプレゼントする気かと尋ね、アングリマーラは
「あなたの欲しい物を、私は用意する事ができます。」と答えた。
先生は「私は一千本の指が欲しい」と言った。

アングリマーラは非常に従順で、先生の無理難題を受け入れた。こうして、アングリマーラは森の中に待機して、森の小道を歩く人間を殺し、その指を切り取って、輪に繋いで、首に掛けるようになった。アングリマーラの力は非常に強かったので、森周辺の町の人々は、大いなる恐怖で震え上がった。999 個目の指を切り落とした時、彼は思った：「あと一個で、私の任務は完成する。先生の願いを満たすことができる。」

仏陀には、毎朝、宇宙の衆生を観察し、自分が助ける事のできる衆生を見つけ出す、という習慣があった。その日、仏陀はアングリマーラを観察した所、アングリマーラには、阿羅漢果を証悟する素質、チャンスがあるという事を知った。しかし、この日、彼が最後に殺そうとしているのは、己自身の母親であった・・・というのも、彼の母親は、国王が軍隊を派遣して彼を逮捕しようとしているという話を聞き、心中が焦りで一杯になり、アングリマーラにこの事を知らせ、同時に、彼に殺人を止める様、諭すつもりであったからである。
もし、アングリマーラが母親を殺したならば、彼は、無間の罪を犯すことになるが、そうなると、この生では、決してジャーナを証する事はできないし、聖道果を証する事は、更に不可能になる。

仏陀は、アングリマーラに対して、大いなる悲心が生じ、この惑い、失われた息子（＝常軌を逸した者）を度し、救済する事に決めた。アングリマーラは、遠くから母親が歩いて来るのをみて、それが己の母親だという事がすぐに分かったが、しかし、彼の心はすでに冷酷で無情なる状況にあった為、最後の一本の指を手に入れる為に、母親を殺そうと思った。
この時、仏陀が現れた。アングリマーラは仏陀を見て喜んだ。というのも、彼は己の母親を殺さなくても済んだから。こうして、彼は仏陀を殺そうとして、仏陀を追いかけた。

仏陀は神通によって、ゆっくりと歩き、アングリマーラは必死になって全力で走ったが、アングリマーラは、仏陀に追いつく事が出来なかった。

アングリマーラ：
「沙門！止まりなさい、止まりなさい」
仏陀：
「私はすでに止まっている。止まっていないのは、君である！」
アングリマーラは、仏陀のこの言葉の深い意味を理解して、刀を置いて、出家を乞うた。
仏陀は出家を許可し、言った：
「善来、比丘」
アングリマーラはたちまち出家の相となった。

アングリマーラは、己が多くの人を殺し、多くの悪業を為したので、死後、必ず地獄に落ちる事を知っていた。彼には選択の余地がなかった。ただ勇猛果敢に精進すること、そして、もし、この生において阿羅漢聖果を証悟する事ができたならば、悪業が齎す所の苦の報いを徹底的に免れることができる。しかし、彼は、今生の業を受ける事を、免れる事はできない。毎朝、彼が托鉢に行くたびに、村人たちは、石や棒を、彼に投げつけた。その為、彼は托鉢から帰ると、どこかしら怪我をして、身体から血を流した。仏陀は彼を励まして言った：
「アングリマーラ、君は耐えなければならない。これは君自身がなした業であるが故に。このような果報は、まだ軽いのだよ。もし、君が精進しないのであれば、臨終の時、君が償わねばならない事柄は、こんなものでは収まらない。君は忍耐しなければならない。」

彼も、己の怪我・流血は、己自身の業による事を知っていたので、黙って耐えて、禅の修行に精進し、最後には阿羅漢道果を証悟した。阿羅漢は、涅槃に入った後、二度と再び名色が生起する事がない。故に、果報もまたそれに伴って終結し、すべての業報は消失する。アングリマーラが以前になした不善業は、彼の勇猛果敢なる精進の親依止縁となった。時に我々は、不善業をなした後に懺悔する事がある。懺悔はよいが、後悔はよくない。

懺悔とは、間違いを犯した後に、再犯しない事を決意し、誓うことである；後悔とは、何の意味もなく：「ああ、私は間違えた。私は間違えた」と思い続けるだけである。
我々が何か一つの不善業を為したとしても、再犯しないよう懺悔するならば、以前の不善は、後日、我々自身に自戒を促す、親依止縁となす事ができる。

10　前生縁（Pureja-ātapaccayo）

前生縁とは、縁法がすでに住時（＝安定期）に到達した所の、色法の事を言う。
それは、それに伴って縁生法である名法が生起する所の、作用を擁する。たとえば、太陽が出現したが（＋その事によって）、その後に出現した所の人類に光明を齎した（＋というような事）。前生縁は、二種類ある。すなわち：依処前生縁と所縁前生縁である。

一、依処前生縁
先に生起した所の依処色は、この色に依存する所の名法を、生起させる事ができる。これを依処前生縁と言う。心所依処は、心が住む場所である。たとえば、色彩が眼根（眼浄色）にぶつかると、眼識が生じるが、眼識は見るという作用を執行する。この時、縁法は眼根（眼根は色法である）で、眼識は縁生法で、縁力は依処前生縁である。
同様に、音が耳根にぶつかるとき、耳識は（＋音を）聞くという作用（＋を執行するが）、その時の縁法は耳根で、耳識は縁生法で、縁力は依処前生縁である。

もう一つ例を挙げる。我々の身体が硬い机に触れる時、硬さというのは地界であるが、地界が、我々の身体全体に遍満している身根にぶつかる事を通して、身識において、硬さを認識するのである。硬さを認識する身識の生起は、身根が原因であり、もし身根がないならば、身識は生起する事がない。縁法は身根であり、縁生法は身識であり、縁力は依処前生縁である。前生縁は、それ以前に生起した所の色法であり、それは、後に生起する所の名法の因と縁になるものである。

12 因縁によると――「六入の縁により、触が生起する」（＋と言われる）。六入または六根は、先に生起した所の縁法であり、依処前生縁（縁力）によって、眼識、耳識などの六つの触（縁生法）が生起するのである。

二、所縁前生縁
目が色塵を見る時、たとえば、一人の美人であるとすると、通常、男性ならば、もう一度よく見てみたいと思うものだ。ここにおいて、先に所縁（美女）があり、それによって、眼識（見る事）が生起し、次に、貪欲な心（もう一度よく見てみたい）が生起する。
故に、前生所縁（美女の色法）は縁法であり、眼識と貪欲な心は、縁生法であり、縁力は所縁前生縁である。
（後略）

11　後生縁（Pacchā　jātapaccayo）

後生縁は、前生縁とは正反対である。この縁の縁法は、それの前に生起した所の縁生法を支え、強化する。ちょうど、雨が、すでに存在する植物を、成長させるようなものである。後生の心が、前生の色法を支える時、それを後生縁と言う。
古代の大徳の方々は、後生縁を以下のように譬えた：禿げ鷹の雛が生まれると、雛たちには構わず、親鳥は己自身の食物を探しに、即刻、外に出て行く。残された雛たちは想う：「パパとママが帰ってきたら、何か食べさせてもらえる」
雛たちは、親が食べ物を持って帰ってくれるという期待感で待ち続ける。しかし、禿げ鷹は、雛の食べ物を持って帰らない。その時、雛は想う：
「食べ物はもらえないけれど、パパとママがいるので楽しいな。」

次の日もまた、状況は変わらない。両親が食べ物を探すために外に出ると、雛は心の中で考える：「パパとママが帰ってきたら、何かおいしいものが食べられる！」
両親が帰って来ると、彼らは失望する。でも、パパとママが傍にいてくれれば、やっぱり嬉しい！
雛はこうして、毎日毎時間、期待の中で日を過ごすが、父母に対する期待の思いは、両親が巣に戻って来るまで、強烈に雛たちの色法を支えるのである。両親は、食べ物を持って帰らないけれども、彼ら雛たちは、パパとママに会えれば、それだけで嬉しくて、心は活発になった。これら、期待する心、活発な心は、常に雛の体を支え、成長させて行くのである。（《五論註釈書》より引用）

色法の寿命は、心識 17 個分である。故に、色法における、俱生の一番目の心識以外、後ろ 16 個の心識は、後生縁縁力によって、前生の色法を支えることができる。
心路過程は何故、生起するのか？
どのような因と縁の条件の下で、それは生起するのか？
我々は、眼門心路過程を例にして説明したいと思う。

第一番目の原因は、所縁が存在する、という事。一個の所縁（色）が、眼浄色を打つとき、眼門心路過程が生起する（もし、眼門心路過程が生起しないならば、眼識は見ることができず、それが何であるかも認識することができない。）
次に、意門心路過程は、更にそれがどのような様子のものであるか、形状、色等などを（＋しっかりと）見る。すなわち、眼門心路過程と意門心路過程の生起する、その目的は、所縁をはっきりと見る為である。過去有分識が生起する時、眼浄色（眼根）は、その生起を開始する。この心識が滅した後、眼浄色は依然として、存在する。

というのも、それの寿命は比較的長いからで、それは、17 個（＋分）の、心識刹那を維持することができる。有分識が滅した後、二番目の有分波動が生起する。ここにおいて、後生の有分波動（心識）は、前生の眼浄色を支えるが、これを後生縁という。後生の名法は、前生の色法を支える時、それは後生縁縁力に依る。

一番目の有分識と同時に生起する眼浄色は、後に生起する 16 個の心識の支援を受けて、それらは、順次、有分波動、有分断、五門転向、眼識、受領、推度（=推定）、確定、7 個の速行心と二つの彼所縁へと、続く。二番目の有分波動から始まって、最後の一個である彼所縁までの、これらの名法は、先に生起した眼浄色を支えるが、この種の関係性を、後生縁と言う。（後生の心が、前生の色法を支える時、それを後生縁と言う）

12　数数修習縁（Āsevanapaccayo）

これは多少無間縁に似ているが、また、非常に大きな違いがある。数数修習縁（注１）：縁法に属する名法が滅尽した後、この名法は、それに類同（速行心と同じ）するが、しかし、縁生法に属する所の名法をば、更に強固に、更に効率よく、生起させるよう至らしめる。それはちょうど、学生が学科を何度も復習する事によって、その学科に習熟するようなものである。
数数修習縁は、通常は、速行心の事を言う。七個の速行心（＋の事である）。
一番目の速行心が滅し去ると、二番目の速行心が生起する；
一番目の速行心が滅し去ったが故に、二番目の速行心は更に強く、更に効率的に生起する。速行心は業を造る心であり、一番最初の業を造る心は比較的弱く、それが滅した後、比較的強い心念（＝心のエネルギー）が、後続の二番目の心、三番目の心・・・に伝達して行くのである。

（注１）「重複縁」とも言う。

最初の一個目の速行心の力は最も弱く、造られる業は、今生受業（注１）である；二番目、三番目、四番目、五番目、六番目の速行心は、すでに力が相当に強くなっている為、それらが造る業は、無尽業（注２）である；第七番目の速行心の力は、弱くなるので、それが造る所の業は、下世受業（＝次世受業）となる（注３）。

（注１）今生受業：現法受業とも言う。最初、すなわち、一番目の速行心が造る業は、ただ今生においてのみ、果報を齎す事ができる。もし、今生において因と縁が不足するならば、無効業となる。
（注２）無尽業：後々受業とも言う。七個の速行心の内、中間の五個の速行心が造る業は、最も強い。故に、因と縁が具足しさえすれば、次に生きる事になるであろう所の、次の世以降の、どの一世においても、（＋因と縁が）熟する事によって、果報が生じる。
（注３）下世受業：次生受業とも言う。第七番目の速行心が造る業は、次の生において、果報を齎す。もし、次の生において、必要な因と縁が具足しないならば、無効業となる。

五門心路の内の確定、または、意門心路の内の、意門転向と速行の間には、数々修習縁はない。というのも、確定または意門転向と速行は、同一の種類の心ではないが故に；最初の速行から第七番目の速行までには、数々修習縁が存在する；最後の、第七番目の速行心と彼所縁（＋に至る間に）にもまた、数々修習縁は存在しない。

意門心路を例にとると：意―速―速―速―速―速―速―速―彼―彼
【解説】上記表の、一番目の”意”は、意門転向（無因唯作心）で、次の”速”は、すべて速行心（業を造る心）である。”彼”は彼所縁（異熟心）である。
意と速は、同じ種類の心ではないため、（＋両者の間には）数々修習縁は存在しない。一番目から七番目までの速行心（速）は、すべて数々修習縁が存在する。最後、速から彼に至ると、（＋両者の間の）心の性質が異なる為、数々修習縁は存在しない。

上述の通り、数々修習縁は、同じ種類の心の間にのみ発生するが、それはすなわち、速行心である。また、善と善の（＋間の）速行心にも、数々修習縁が存在するし、不善と不善の速行心にも、数々修習縁は存在する。もし、あなたが、善心を何度も重複して続けるならば、善の力は、益々強大になり；もし、不善心を重複して続けるならば、不善心の力は、益々強大になる。
たとえば、我々が、初めて布施をした時の嬉しさは、我々をして二回目の布施をしたいと思わせしめる。一回目の布施が、二回目の布施の心を強烈にするのである。また、たとえば、初めてアビダンマを読んだ時、余り理解できないが、二回目で少し分かり、三回目でもう少し分かり、四回目ではっきりと理解する事が出来るようなものである。これを数々修習縁と言う。

人の性格は、一回、また一回と、（＋心のクセを）不断に、重複して積み重ねていく事によって、塑性される。性格の種類は、以下の六種類に、分けることができる；
貪行者、瞋行者、痴行者、覚行者または智慧行者、及び散漫行者である。

一人の人間の、その貪根心が特別に強い時、貪行者となる；一人の人間の、その智慧が特別に高度である時、覚行者となる。

たとえば、一つの貪が生起する時、もし、それを止めることをしないのであれば、二番目の強烈な貪が生じるが、もし、それをも止める事ができないのであれば、貪心は、益々強烈になる。毎回、貪が生起する度に、我々がそれを止める事ができないのであれば、その潜在的エネルギーは益々大きくなり、最後には、我々をして、貪行者としての性格を作り上げる事になる。それはちょうど、雪だるまを転がせば転がす程、大きくなるのと同じであり、道の途中のどこかで止めて、太陽に照らされない限り、雪だるまが小さくなる事はない。雪だるまが、道の途中で止まるという事はすなわち、貪が生起しても、抑制される事を意味する。

善法とは、太陽の如くであり、貪を溶かすことができる。もし、貪が生起する度に、我々はそれを調伏する事ができるならば、雪だるまが益々大きくなる事はなくなる。長い輪廻の中において、我々は同様の過失、同様のパターンを重複して体験し続けているのである。ある時、あなたは思う：「明朝、禅の修行をする為に、今夜は早く眠ろう」しかし、夜になると、何かの口実を見つけて、TV を見るとか、友人に電話するとか、友の訪問を受け入れるとかして、夜更かしし、朝起きれなくなって、早朝に禅の修行をするチャンスを逃し、心中は後悔で一杯になるのである。

次の日も、早く眠る事は出来るのに、何かと口実を見つけて、前日の失敗を繰り返す。もし、あなたが細心の注意を払って、己自身の人生を振り返るならば、あなたは、過去にした事のある事柄を、再び重複してなしているだけだ、という事を発見するに違いない。
それは前世のパターンが、再度、出現したに過ぎないのである。数々修習縁を理解する事によって、我々は、己自身の性格を理解する事ができるし、また、己自身の性格を変えるのが、なぜこれほど困難であるかも、理解する事ができる。多くの場合、我々は、己自身の何かの欠点を直そうという意志はあったとしても、通常、それには非常に時間がかかるのものなのだという事が知れる。それは悪習・悪癖を形成した日時が、あまりに長い為であり・・・「氷凍三尺非一日之寒（＝ローマは一日にしてならず）」、その上に、己自身の心の力が弱いが故、なのである。

菩薩が仏陀になるためには、多くの悪癖を直さなければならない。そうであるが故に、彼（＝ゴータマ仏）は、四阿僧祇劫と十万大劫をつかって、ようやく 10 のハラミツを円満し、仏の境地に到達したのである。

欲楽は多くの過患を齎すが、しかし、それでも我々はそれを手放す事ができず、出家する事ができない。何故であるか？　　それは、我々が、生々世々、代々累積してきた無明と愛欲が、非常に強烈であるためである。我々は今、四神足の一つをも持っていないが故に、我々自身の身辺の雑事、身辺の親戚・友人、財産、家庭などの、すべて手放すことができないのである。

ある種の人々は、仏法を学ぶや否や、出家したいと思う。何故であるか？
それは、過去の生（=過去世）の多くにおいて、出家していた（＋体験に基づく）、数々修習縁の故である。この縁があるが故に、この世では、仏法は痛苦から解脱することができる（＋教えである）と聞くや否や、出家したいと思うのである。これは、前世における、重複した縁力が、彼をして出家したいという思いを、起させしめるからである。ある種の人々においては、その前世に、この種の出家の因縁はなく、前世において、この種の薫習がない為に、20 年も仏法を学んでも、出家したいという発想は出てこないのである。

上述の事から、数々修習縁は、非常に重要である事が分かる。仏陀は常々、「諸行無常」と言う。しかし、生命に異変・改変が訪れた時、我々はどうして、仏陀の教えを思惟し、結果、泰然としていられないのであろうか？　　たとえば、事業が失敗した、家庭に問題が起きた、友人が反目して敵になったなど等、どうして我々は、それを無常と見做せないのであろうか？
我々は、過去に一度、仏法を聞き、次に何年か後にまた一度聞く。もしかすると、もう長年、仏法を聞いていないかもしれない。そして、我々は、過去に聞いた仏法を、時々刻々思惟し、思い起すことができず、故に、無常観が、我々の心中に育つ事がない。それはまた、我々には、数々修習縁が欠けているのだ、と言い換えてもよいかもしれない。

数々修習縁を強化する為に、我々は常に、無常を観じ、心身にどのような現象が生起しようとも、それが苦または楽であっても、我々はそれらを「無常・無常」と見做し、この種の、法において住する所の観照を、己自身のよき習慣となさなければならない。そのようであれば、今後、我々の心身に、どのような異変・改変が生じようとも、我々は一切は無常であると思いなして、即刻それを放棄・手放すことができる。このように実践すれば、我々は、世間八風（注１）において、動揺する事がない。

我々が、呼吸を観じつづければ、定力は更に益々深まるが、これは数々修習縁の力である；我々は、名色を無常、苦、無我として、観照し続けるが、それによって智慧が熟し、道果を証悟する事ができる。これもまた、数々修習縁の力である。

（注１）世間八風：
得（labho、または hita 利益）、不得（失）（alabho、または ahita 無利益）
名声（yaso）、悪名（ayaso）誹謗（ninda）、称賛（pasaṁsā）
楽（sukhaṁ）、苦（dukkhaṁ）

13　業縁（Kammapaccayo）

業縁には二種類ある。すなわち：
異刹那業縁（nānākkhaṇika-kammapaccayo）；
俱生業縁（sahajāta-kamma-paccayo）。
業：パーリ語「kamma」の意味は、「作為」であり、善または不善の思心所を指す。52 の心所の中に、思心所というのがあるが、それは業を造るのを本務とする心所であり、すなわち、業である。

仏陀は《増支部》の中で、「比丘たちよ、私は業となる（＋因）はすなわち、思である、と言う。その願望にそって、人々は、身、口、意によって業を造る。」
業が熟すと、ある人は地獄へ行き、ある人は傍生者になり、ある人は餓鬼になり、人身を得る者、または天道に生まれる者もいる。

業の定法：造られた業が、その善・悪に従って、相応する果報を齎すのを保証する（＋のが、すなわち、業の定法である）。
たとえば、種は必ず、その種類に応じて、実を結ぶようなものである。我々が、手に持つボールを壁に向かって投げた時、強い力で投げれば、戻って来るボールの力も強くなって、自分の所に戻って来る；少ない力で投げれば、戻ってくる力は弱くなるものの、同じく、自分の所に戻って来る。これが業の定法である。

どのような果報を得るかは、端的に、どのような種を植えるか、にかかっている。ニガウリの種を植えたならば、将来、手に入れるのはニガウリであり、へちまや冬瓜では

ありえない。我々は、善の果を得たいのであれば、善の因を植えなければならない。苦の果を得たいのであれば、苦の因を植えればよい。

一、異刹那業縁

　善業または不善業に関わらず、そのすべてにおいて、業縁の縁力が、名法及び業生色法を支えている。異刹那業縁は、業と果報は、同時には生起しない事を、表している。すなわち、植えた因は、ある一定程度の時間が経過して後はじめて、果報を生起させるのである。

たとえば、我々は、この世（＝今回の人生）で布施をするが、しかし、五年後または次の世においてようやく、果報が熟す。これを異刹那業縁と言う。心の変化は無常であるが故に、我々は各種多様な業を造るが、結果、各種各様の果報を、体験する事になる。業の根源は無明であり、無明とは真実法を如実に知見しない、という事である。

12 因縁法によると、無明の縁によって行あり――無明が行為を引き起す――それは、意業、口業、身業の行為を含むのである。衆生は身・口・意を通して、善・悪の業を造る。10 種類の悪業、10 種類の善業がある。

身悪業には三種類あり、それは：

１、殺生――一切の有情に対して、残虐に殺害する、殴打する、及び虐待する事。

２、偸盗――盗みの方式でもって、他人の財物を得る事。

３、邪淫――正当でない性的行為。例えば、良家の婦女、未成年の少女または有夫の婦人などと性的行為を発生させる事。

いわゆる身善業とは、上記の三項から遠く離れる事。

口悪業には四種類あり、それは：

１、妄語――己の利益、または他人の利益の為、嘘をつく事。

２、両舌――誹謗したり、故意に中傷したりして、両者を分裂させる。

３、悪口――粗野な、人を傷つけるような、または人を不愉快にさせる言語でもって、他人と会話する。

４、綺語――述べている事柄が、時節に合わず、不適当であり、事実でなく、無用なもの、真理と仏法に違反しているもの、無価値なもの、合理的でないもの、極端なもの、及び無益なものなど等。

上記の四種類の口悪業から遠く離れるのが、口善業である。

意業は、三種類あり、それらは：

１、貪婪――貪心所と、他人の財物を得たいと思う欲望が、同時に生起する事。

２、瞋恨――瞋心所と、他人が傷つき、苦痛に出会うのを望む欲望が同時に生起する事。

３、邪見――業報の説を否定する事。

反対に、貪婪、瞋恨がなく、正見があるのは、意善業である。凡夫が造る善業は、三個の善心（無貪、無瞋、無痴）と相応しているものの、なお、業と見做される。というのも、無明と愛欲が、いまだ生命流の中に潜在しているが故に。無明と愛欲が生命流の中に潜在しているならば、造（ナ）した業は、依然として果報を齎す。
まさに一本の樹木においては、根が最も重要であって、根を切って取り除かなければ、ただ枝や幹だけを切っても、樹木は依然として成長する（＋のと同じであって）、それは、根本が取り除かれていないが故である。

同様に、長い輪廻の内において、もし、無明と愛欲を取り除かないのであれば、我々が造る所の善業と不善業は、一たび、その因と縁が熟したならば、果報を生じせしめるのである。
「業はどこに蔵されているのか？」あなたはとても知りたいに違いない。業に潜在するエネルギーを、我々は見る事ができない。ちょうど、一粒の種が、因と縁が具足すれば、やがて芽を出すであろう、その潜在的エネルギー（＋が、我々には、見えないのと同じように）。《ミランダ王問経》で、ミランダ王は、那先比丘に訊ねる：
「尊者、業はどこに蔵されているのか？」
尊者は答える：
「国王、業は刹那に生・滅する所の心識、または身体のどこかに蔵されている、とは言えない。しかし、身・心（名色）の縁によって、業は適切な時に顕現する。ちょうど、マンゴーの実は、マンゴーの木のどこかに蔵されているのではないが、しかし、マンゴーの木が、適切な季節を迎えたならば、開花して、実を結ぶが如くに。」

マンゴーの木が、マンゴーの実を実らせる、潜在的エネルギーはどこに蔵されているのか？　木の根？　枝？　幹？　木の葉？
このように考えを巡らせても無駄である。マンゴーの木は適切な季節を迎えると、開花して、実を実らせる。この事は、一切は因縁法であり、因と縁が具足した時、開花し、結実するが、そのような状況（＋の下になければ）、＜無＞があるだけである（＋という事を意味する）。業もまた同じであって、我々が千年以上も前に造（ナ）した業が、今現在（＋業が）熟していなくて、果報がないならば、それは因と縁が、いまだ熟していない、という事を意味する。因と縁が具足する時、いかなる刹那においても、業は熟するのである。

善悪の業を造（ナ）す時、その主因は、思心所である。一人の人間の思心所が、どれ程に強いかによって、その人の業もまた、強くなる。ちょうど、我々の手の中にあるボ

ールが、強い力で壁に打つ付ければ、強い力で、己自身に戻って来るように；思心所が弱い時、業力も弱い。ちょうどボールを、小さな力で壁に向かって投げる時、戻って来る力が小さいが、しかし、己自身に向かって戻ってくる、というのと、同じである。

猟師可拉（＝カーラ）の物語は、業を造る”思”の力を、物語っている。可拉は、猟師であった。ある日早朝、彼は一群の猟犬を連れて、猟に出た。道で、一人の比丘が托鉢しているのを見た。彼はこれは不吉な予兆であると誤解して、心の中で思った：
「この、人を嫌な気持ちにさせる、頭の禿げた人間に会うなんて！今日の収穫は台無しだ！」

その日、彼は、本当に、何等の獲物も得られなかった。家に帰ろうとした時、彼は再び、あの比丘が、町から出て（＋己の住居に）戻ろうとしているのを見た。彼は怒りに燃えて、猟犬を放って、比丘に咬みつかせた。幸いな事に、比丘は走るのが速かったので、木の上に登り、猟犬から身を守った。猟師は木の下まで来ると、弓矢で比丘の脚裏を狙って、矢を放った。比丘は足裏に、非常なる痛みを感じ、袈裟を保つことができなくなった為、袈裟が彼の手から落ちて、真下にいた猟師の上にかぶさった。
猟犬たちは、黄色の袈裟を見て、比丘が木から落ちてきたのだと誤解して、急いで駆け寄って、飛びついて、むやみやたらに咬みついた。比丘は木の上からこの状況を見て、木の枝を一本投げ落とした。その時初めて、猟犬たちは、己が咬んでいたのは比丘ではなくて、己の主人である事に気が付き、四方に逃げ散った。

猟犬が逃げた後、比丘が木から降りてみると、猟師はすでに、猟犬にかみ殺されていたのである。彼は心中悲しく思い、また、猟師の死について、自分に責任があるのかどうかよくわからないでいた。というのも、彼の袈裟が原因で、猟犬が猟師を攻撃したのだから。彼は仏陀に会って、この問題を解決してもらおうと思った。仏陀は彼を慰めて言った：
「あなたは、猟師の死に、責任を感じる必要はない。あなたは、道徳にも、戒律にも、違反していない。実際は、猟師が、彼が傷つけてはいけない人を、恣意的に傷つけたその結果、このような悲惨な果報を、得る事になったのだ。」
仏陀は続けて述べる：
「無辜の人間を害する者は、逆風に砂を撒くように、最後には（＋禍が）己自身に戻って来る。」《法句経 125》

《中部・小業分別経》には、各種各様の異刹那業縁が描写されている。
例えば、ある人は非常に吝嗇で、何事にも、一銭も出したくないという時、次の世で貧困（＋の家庭）に生まれる（＋という類の話）；

ある人は、心が広く、布施が好きで、その結果、来世は豊かになる；
ある人は、衆生に対して、慈愛が充満しており、その為、彼は来世において、姿・形が荘厳になる；
ある人は、常に瞋恚の心を生じている為、来世は（＋面相が）醜くなる。
ある種の人々は、影響力を持ち、ある種の人々は、影響力が薄い。
それはなぜか？　それは嫉妬心が原因である。嫉妬心のない人の善思は、彼をして、影響力のある人間にする。

ある種の人々は、生まれつき智慧に満ちており、ある種の人々は智慧がない。それはなぜか？　　これは、前者は過去世において、常に善知識と親しくするという業縁の種を植えた為であり、（＋人生に関する）重要な問題についても、質問する勇気を持っている:「私はどうすれば、永恒なる楽しみを得ることができるのか？どのようにすれば、智慧を強化することができるのか？どのようにすれば、すべての思を回避する事ができるのか？」

仏陀は、何度も、殺生、偸盗、邪淫と妄語は、四悪道に生まれる原因だと述べたが、しかし、それは絶対的ではない。以下のような物語がある。
昔、スリランカに一人の国王がいて、名を Vasabba と言った。多くの占い師が、彼の為に占いをして、国王の在位は 12 年間であり、12 年後には崩御する、と言った。これらの占い師は、業の様子に、各種の類型的な特徴、たとえば、面相、星の動きなどを加えて、予測したものである。国王はこの結果を聞くと、非常に憂慮して、当時の仏教の法師たちに、解決の道を尋ねた。

あの時代、スリランカの仏教は非常に盛隆しており、法師たちは国王に、多くの東屋を建て、寺院を修復し、橋や道路を整備するなどの公益事業をして、命運を変えるように勧めた。国王はこの忠告を聞いて、命を延ばす為に、積極的に実践した。国王は、不断に善をおこなった為に、彼の（＋国家の）統治時間もまた継続した。12 年から 24 年、36 年・・・更に長く続いたのである。国王は、智慧と精進を通して、命運を変え、非常なる長寿を生きたのである。

二、俱生業縁
俱生業縁は、異刹那業縁ほど重要ではない。それは「思」心所が、業縁の力でもって、己自身と同時に生まれるその他の諸法を支える事を言う。たとえば、善速行心には 34 個の名法があるが、思心所のほかには、一個の心王と 32 個の心所、及び俱生色法がある。ここにおいて、業縁としての”思”は、その相応する名法において、各種の作用を及ぼすが、同時にある種の色法を生起させるものである。

14　異熟縁（Vipākapaccayo）

この縁の縁法は果報名法――心と心所であり、縁生法は、果報名法及び俱生業生色法である。諸々の果報名法及び俱生業生色法は、みな、過去の業が熟した事によって、生じるものである。一つひとつの意向･願望をこめた行為は、すべて果報を生じせしめる。因が果を生じるため、果から因を解読する事が出来る。心の変化は無常である為、我々は、色々な業を造（ナ）すし、また、各種各様の果報を、体験する事になる。

たとえば、我々の容姿、寿命、健康、性別、智慧など等は、みな違いがあるが、これらをみると、我々が前世において植えた因を知ることができる。業は、善でもあり、また不善でもありえるが、果報の本質においは、善であるか、不善であるかと区別する事はない。もし、善であるとか、不善であるとかと言うのであれば、それは、善と不善によってもたらされた結果を指して、言うのである。諸々の果報心は、業の成熟を縁として生じるもので、それらは受動的であり、善心や不善心ほど活発ではない。

縁生法に属する果報名法（心と心所）及び俱生業生色法は：
１、心：すなわち、すべての果報心。人類であっても、天神であっても、これらはすべて、前世において植えた所の因によって、得る果報である。結生心、有分心と死心もまた、果報心の一である。
２、心所：52 の心所がある。例えば：触、受、思・・・など等。
３、業生色：四大（地水火風）を含む、性根（男または女）、眼根、耳根・・・など等。

先に果報結生心について説明する。我々は、一人の、禅の修行者の例を、見てみようと思う。彼は、前の一世（=前世）を思い出すことができる。彼は、人に飼われた一頭の豚で、緬甸（＝ミャンマー）の小さな農場に、住んでいた。彼の主人は毎日、伝統的な習慣に従って、托鉢の僧人に食べ物を供養していたが、想像もできない事であるが、驚くべきことに、この豚は、主人の供養に随喜する事ができたのである。臨終の時、他人の善業に対して随喜する事のできる慣行業が熟したため、この豚の臨死意門心路過程に、趣相が顕現した。

彼は、臨死意門心路過程の中において、母親の子宮の赤い色が、見えた。その意味は、人間に生まれ変わろうとしている、という事である。彼の心は、しっかりと、この趣相を掴み、この過程が発生しているさなかに、潜在している所の”無明”が、彼をして盲目にさせ、その事によって、彼は、新しい生命の内にある禍を、知る事ができなかった。故に、”渇愛”によって、新しい生命に対して、強烈な執着が生じた。

臨死意門心路過程が終息すると、二つの彼所縁及び有分心は、発生する事もあれば、発生しない事もある。その後、死亡心（cuticitta）が生起するが、それは一期の生命の最後の心であり、死亡の作業を執り行う。死亡心の滅尽するに従って、命根もまた切断される。一たび命根が切断されると、一期の生命は、正式に死を宣告される。しかし、潜在的な業力は、いまだ消失していない為に、無明と渇愛（因と縁）の力は、心識をば、前へ進ませ、その為、業行（異刹那業縁）は、結生心（異熟縁）を形成する。死亡心が滅尽した後、間断を入れず、無間縁を通して、次の世の結生心が、即刻、人的世間において生起する。（＋その時）臨終の時に熟したものと同じ善業に基づいて、赤色を目標として縁に取るが、この善業は、いまだ断じ除かれていない所の、無明と渇愛によって突き進むのである。

こうしたことから、今生の第一番目の心、すなわち、結生心であるが、それは、前世の業行の直接の果報であるという事になるのである。全体的に総括してみれば、生死輪廻は、ただ因果の法則に従った、心相続流に過ぎない（＋事が分かる）。もし、特定の縁、たとえば、因縁、業縁、異熟縁、無間縁など等の運用がなければ、生死輪廻は存在することができないのである。結生心が生起する時、その相応する 33 個の心所（7 遍一切心心所、6 雑心所、19 美心所、1 無痴心所）は、30 個の色法（身 10 法聚、性根 10 法聚、及び心所依処 10 法聚）と同時に、生起する。それらは皆縁生法であり、縁力――異熟縁を通して、生じるのである。結生心の後、有分心が生じる。結生心も有分心である。というのも、両者は共に、同一の業の果報心であり、かつ、同一の所縁を、縁に取るが故に。

16 個の有分心が秩序に従って生・滅した後、一生のうちの一番目の意門心路過程が生起して、新しい生命（五蘊）を所縁として、執着する（＋事が始まる）。この新しい生命の一番目の心路過程の中において、それは、新しい生命への貪着（＝貪婪な執着）を生じせしめるが、それは、生命の苦相については無視しつつ、新しい世の、第一番目の心路過程から（＋始まって、すでに）、新しい生命の生存と維持を、渇望し始めるのである。
一番目の意門心路過程が滅すると、次には有分心が生起する。その後に、心は五根が成熟するまで、生・滅、生・滅、生・滅・・・を繰り返し続ける。

我々の五根――眼、耳、鼻、舌と身体は、業縁を通して生起する、異熟縁生法である。異熟縁と業縁は、相互に密に関係し合っているが、この五根を生起せしめる所の業縁は、以下の通りである：
眼根（異熟）は、見たいと言う欲望（業）によって生起する；
耳根（異熟）は、聞きたいと言う欲望（業）によって生起する；

鼻根（異熟）は、嗅ぎたいという欲望（業）によって生起する；
舌根（異熟）は、味わいたいという欲望（業）によって生起する；
身根（異熟）は、接触したいという欲望（業）によって生起する。

我々の五根――眼、耳、鼻、舌と身体、その美しさまたは醜さは、同じく業の異熟である。ある種の人々は眼力が非常に良く、子供の時から老いるまでメガネを使う事がないが、これは彼の善なる果報である；ある種の人々は聴覚が鋭敏で、70 歳を過ぎても耳がよく聞こえるが、これもまた善報である。

五根が熟すと、目は、色塵と接触するようになり、結果、眼識が生じて（＋ものが）見える様になり、次に、眼門心路を生じせしめる；
耳は、音塵と接触するようになり、結果、耳識が生じて、（＋音が）聞こえる様になり、次に、耳門心路を生じせしめる；
鼻は、香塵と接触するようになり、結果、鼻識が生じて、（＋匂いが）嗅げる様になり、次に、鼻門心路を生じせしめる；
舌は、味塵と接触するようになり、結果、舌識が生じて、（＋味が）味わえる様になり、次に、舌門心路を生じせしめる；
身体は、触塵と接触するようになり、結果、身識が生じて、（＋塵と）接触することができる様になり、次に、身門心路を生じせしめる。

我々の眼識、耳識、鼻識、舌識と身識もまた、前世において造られた所の、業によって生じた果報であり、それは果報心に、属するものである。ある種の人々は、生まれつき目が見えないが、これは、前世においてなした業によって、眼識が生起しない為である。我々が睡眠状態に入る時、何も見えず、聞こえず、嗅げず、触れなくなるが、その時、如何なる心路過程も生じてはおらず、心は一種の睡眠状態に入るが、これを有分流と言う。

以下に述べる幾つかの状況の他では、心流（＝心の流れ）が、中断する事はない：
１、四禅八定を証悟した阿羅漢とアナーガミが、滅尽定に入る時、心流は一時的に中断する；
２、無想天に生まれた梵天神の心流は、一時的に中断する；
３、阿羅漢が般涅槃に入る時、二度と再生しないが故に、心は、二度と生起することがない。その為、心流は徹底的に中断（ママ）する；

このように、五門が閉じる時、必ず何らかの種類の心が生起して、我々の生命流を、中断する事なく維持しなければならないが、これが有分心である。有分心は、前世でな

した業によって生じる果報心であり、受動的で、活発ではなく、離心路過程に属する心であり、それは心路過程の心のようには、活発ではない。心路過程の内の速行心は、貪、瞋、痴、または無貪、無瞋、無痴と相応し、業を造る心（速行心）に属する故に、それらは非常に激しく揺れ動くのである。有分心は異熟心であり、それは自力で業を造ることはできず、また、業を造る事にチャレンジする事もない。

異熟は、究極名色法（＋の形式）で以て、生命の中に顕現するが、しかし、潜在的な有身見の影響によって、我々は究極名色法を概念化し、結果、それらを永恒なる「私」であると誤解してしまう。諸々の果報は、すべて、業が熟する事によって生じるものである・・・すなわち、我々の五根――目、耳、鼻、舌と身体がそうである。

15　食縁（Āhārapaccayo）

この縁においては、縁法が縁生法の存在を支え、また、後者が成長するのを支援する。食の主要な作用は、支える事と、強化・安定化である。食縁には二種類ある：
色食（rūpāhāra）；
名食（nāmāhāra）。

一、色食
食物の中の食素（栄養）は、また段食とも言う。それは、色身の縁法である。
なぜ段食と言うのか？　段とは、塊の事を指す。仏陀の時代、比丘は手でもって食事をし、スプーンなどは使わなかった。彼らは手を鉢の中に入れて、ご飯を取り出すと、御団子のように一塊にし、その後に口の中に入れた。故に、段食と言う。
段食は如何にして、我々の身体を支え、強化するのか？　我々は、食物を口に入れ、その後に飲み込むが、胃の中には消化の火があって、飲み込んだ食物を消化するのを助ける。食物が消化されると、新しい代の色聚を造りだすが、それは食生色（食物によってできた色法）と言う。食生色は、全身に遍布する。
もしそれが、目に届いたならば、我々の目を滋養する；
もしそれが、耳に届いたならば、我々の耳を滋養する；

もしそれが、全身の筋肉に届いたならば、全身の筋肉を、滋養する。
段食は、我々の身体を支え、身体をして体力のあるようにし、また生命を延長させる。
【縁法は食素（段食）で、縁力は食縁で、縁生法は我々の身体である】
究極諦（＝究極的な真理）で言えば、色食は、四つの因（業、心、時節、食素）から生じる所の一切の色聚を支え、強化する。
何の縁力を通してか？　食縁である。

二、名食
　名食には三種類ある：
一、触食；
二、意思食；
三、識食。

この三種類の名食は、縁法であり、名食と共に俱生する名色法は縁生法であり、縁力は食縁である。
１、触食（phassāhāra）
触には６種類ある――眼触、耳触、鼻触、舌触、身触と意触である。
色塵が我々の目を打つとき、眼触が生じる；
音が我々の耳を打つとき、耳触が生じる；
香が我々の鼻を打つとき、鼻触が生じる；
味が我々の舌を打つとき、舌識が生じる；
物体が我々の身体に接触する時、身触が生じる；
我々が未来について計画を立てる時、過去を回想する時、思考、考察する時などにおいて、意触が生じる。
触食の主要な作用は何を支え、強化しているのか？　すべての触食は、「受」を支えている・・・たとえば、眼触は受を生じるし、耳触は受を生じるなどなど。合計三種類の受があるが、すなわち：楽受、苦受、不苦不楽受（捨受）である。

たとえば、目が美しい色塵を見る時、見始めた最初の頃に、眼識と共に生起するのは捨受であるが、しかし、不断に色塵の美しさを思惟する事（意触）を通して、楽受が生じる；
もし、目が、嫌いな人を見たならば、見始めた最初の頃に、眼識と共に生起するのは捨受であるが、しかし、嫌いな人の憎々しさを、不断に思惟する事によって、苦受が生じる；
もし、目が見ず知らずの人を見るならば、この人の中立的な所に鑑みて、不苦不楽受（捨受）が生じる。

耳が（＋己を）賛美する声を聴くとき、その聞き始めのころに、耳識と共に生起するのは捨受であるが、しかし、他人が己を賛美するのを不断に（＋聞いてそれを）思惟すると、楽受が生じる。
もし、耳が（＋己を）誹謗する声を聴くとき、他人の己への誹謗を不断に思惟する結果、苦受が生じる。
一般的な音を聞くとき、音の中立性を思惟して、不苦不楽受が生じる。
このように、触食は、三種類の受を、支えるのである。

仏陀はこの事を、皮膚の無い牝牛に、譬えている。たとえば、一頭の牛がいて、生きたまま、その皮を剥ぐとすると、この牛がどこへ行こうが、多くの細菌と虫が血肉（＋の栄養を吸って）、その中から湧いて出てくる。塵、砂なども血肉に粘着するし、草木にぶつかれば、耐え難いほど痛いであろう。地面に這えば、地面にいる虫に咬まれるし、水に入れば、水の中にいる虫に血を吸われるし、他のものに触れないよう立つにしても、空中を飛んでいるアブなどに咬まれる。皮膚の無い牛は、横になっても立っていても、耐え難い苦痛に襲われる。どこに立っても、壁に沿っても、木の下でも、水の傍でも・・・そこに住んでいる動物が、その牛を咬むに違いない。《相応部 12：63 経》。

六根が六塵に触れるとき、我々は眼触、耳触、鼻触、舌触、身触及び意触に晒され、かつ、その次には（＋それが）強化され、また、三種類の受が生起することになる。
この三種類の受によって、我々は圧迫を受けており、それは、我々をして不断に不善心を生起せしめ、よって、輪廻を延長させる事になる。

「触の縁によって、受が生起する」は、12 縁起支の中における、非常に重要なキーポイント、環である。というのも、受は貪愛を促す・・・すなわち、「受の縁によって、愛が生起する」からである。貪愛は、輪廻の根本であり、我々が輪廻から解脱したいのであれば、貪愛を断ち切らねばならない。貪愛を生起させないためには、我々は受をば、無常・苦・無我として観照して、それによって、貪愛が生起してしまう所の段階まで、（＋心が）進まないようにする事を、学ばねばならない。

貪愛が生起すると、次には、強烈な執着――取に至る。強烈な執着が原因で、我々は欲しい物を手に入れるよう画策し始めるが、その行動は、業を造る。業がひと度造られると、それが善業であろうと、悪業であろうと、必ず業力が残留する。一たび業力が熟すると、新しい生命が始まる。新しい生命が始まると、必ずや老、病、死、愁、悲、苦、憂、悩が伴い、そのことによって、一塊の苦蘊が生起することになる。これが 12 因縁の回転である。

（＋上記の事柄は）無明が根本因ではあるが、しかし、キーポイントは「受」にある。
楽受を愛まで成長させない事ができれば、受は滅する：
それによって、取も滅する；
取が滅すると、有も滅する；
有が滅すると、生は滅する；
生が滅すると、老、病、死、愁、悲、苦、憂、悩はなくなる・・・
こうして、苦蘊の全体が消滅する。故に、触食は非常に重要である（＋ことが分かる）。

■2. 意思食（manosañcetanāhāra）

意思食は、我々の身口意に対して、動力を与えて、業を造（ナ）さしめる。欲界速行の心は、善業または不善業を造るが故に、業を累積せしめる。そして、業を累積するのは、「思」である。思は、善心または不善心の中のおいてのみ業を蓄積するが、果報心または唯作心の中において、業を積むことはない。意思食は、俱生名法を支えるかまたは強化して、それらをして目標に向かって行動を取らしめ、かつ業を造る。

名法は、それぞれに、個別の作用があるが、思は、これらの名法を組織して、その後に、それらを目標に向かわせ、目標に向かって行動を取らしめる。それは、たとえば、味の所縁が舌根を打つ（＝ぶつかる）と、思は、「触」を促すかまたは指導して、（「触」に）ぶつかるという作用を演じせしめ、「受」がすばやく味を体験するように促し、また、味に執着するようにする。

ここにおいて、意思食は、食縁による支えを通して、または、縁生法――俱生名法（触、受、愛、精進等）を強化する事を通して、目標に向かって行動を起し、業を累積する。
私は経蔵（＋に書かれた）所の方法によって、意思食を解説したいと思う。
経蔵の解釈によると、思とはすなわち、業である。意思食は、欲界、色界と無色界の、三界における輪廻を支え、強化する。意思食は三界の輪廻を支えるという事は、何を意味しているのであろうか？

意思食は、我々の身口意に動力を与え、業を造る。業は、善業と不善業とに分けられる。不善業は、純粋に欲界に属し、それは身業、語業と意業に、分けることができる。
（１）身業：殺生、偸盗及び邪欲楽行（邪淫）は、通常、身門を通して発生する。
（２）語業：妄語、両舌、悪口及び綺語（無駄話）は、通常、語門を通して発生する。
（３）意業：貪婪、瞋恨及び邪見（因果を認めない）は、通常ただ、意門においてのみ、発生する。

善業はまた、欲界善業、色界善業と無色界善業に分けることができる。欲界善業は、布施、持戒、尊敬、奉仕、功徳の回向、功徳の随喜、仏法聴聞、仏法の宣揚と己の見解が正直（＝真っ直ぐで正しい）である等の、10 種類を上げる事ができる。色界善業は、初禅、二禅、三禅と四禅及び五禅（アビダンマでは五種類の禅定をいい、経蔵では四種類の禅定を言う）を指す。初禅から五禅までを証悟した人間は、すなわち、色界善業を蓄積したことになる。無色善業とは、四つの無色界禅の事を言う。すなわち : 空無辺処、識無辺処、無所有処と非想非非想処である。

もし一人の人間が、欲界不善業を造したならば、当該の不善業（意思食）は、食縁によって滋養され、その人間が、悪趣に生まれ変わるのを支える；
もし、彼が欲界善業を造したならば、当該の善業はそれを滋養して、彼をして欲界に生まれるようにする；
もし、彼が造したのが色界善業であれば、当該の善業は、彼が色界（16 層の色界天）に生まれ変わるよう支援する；
もし、彼が造したのが無色界善業であれば、当該の善業は、彼をして、無常色界（空無辺処無色界天、識無辺処無色界天、無所有処無色界天、非想処非非想処無色界天）に生まれ変わるよう支える；
もし、一人の禅の修行者が、識無辺処無色禅の禅定の中で往生したならば、この業は、彼をして無色界の識無辺処天に生まれせしめるようにする。
どこに生まれようとも、仏陀は、それは苦なる現象であると言う ; それはちょうど、粘着した糞便が少量であっても、同じく臭いのと同じように、どのような出生もまた、人々を厭わせるものである。

■３、識食（viññāṇāhāra）

識は、目標の特徴を認識する。その作用とは、心所の先導をする事である。
識は縁法で、その俱生名色法は、縁生法である。識とは、六種類の心識――眼識、耳識、鼻識、舌識、身識と意識を言う。日常生活において、我々の六根は、外部の六塵――色、声（音）、香、味、触、法と接触する時に、六識を生じさせているが、それは＜認識（認知する）＞の作用である、と言える。

識の生起に伴って、心所が、生起する。ここにおいて、意識がその相応する心所を支え、強化する事によって、それらが、更に目標を徹底的に認知できるようにする。意識は目標の覚察（＝知ること）によって、生命の延長をなす。識は、ここにおいて、異熟の結生識――生命の一番目の心識をも含む（＋と言う）。結生識は何を滋養し、何を強化しているのか？　12 因縁によると、「識の縁によりて名色（＋あり）」――識は、名色の生起を支えているのである。

ここにおいて、名と言っているのは、相応する心所であり、色と言っているのは、業生色である。識は、名色を支えるが故に、
「名色の縁により、六処が生起する；
六処の縁により、触が生起する；
触の縁により、受が生起する；
受の縁により、愛が生起する；
愛の縁により、取が生起する；
取の縁により、有が生起する（有とは業を造す、という意味である）；
有の縁により、生が生起する；
生の縁により、老、病、死、愁、悲、苦、憂、悩が生起する。
かくの如くに、一塊の苦蘊全体が生起する」

結生識の生起によって、12 因縁の循環が引き起されるのである。我々は、識食に対して、どのように対処するべきか？　仏陀は、我々に対して、識食は下記のように観察するべきと教えている――
たとえば、国王が軍隊を派遣して、一人の強盗を捉まえたとする。強盗は、国王の下に、連れてこられる。国王は強盗の手足を縛り、街中を引きずり回して市民の見せ物にし、最後に彼を、刑場に連れて来る。刑場で、槍でもって、彼の身体に、100 個の穴をあける。強盗が死なないので、再び 100 回、槍で刺す。半日後、強盗はまだ死なないので、再び 100 回槍で刺すが、まだ死なない。

「比丘よ。この強盗の身体には、300 の穴があいていて、手のひらの皮膚さえも、元の皮膚は見つからず、すでにボロボロである。この人間は極度に苦しいか、否か？」
「世尊、まさに極めて痛苦であります。100 回刺されるだけで、すでに痛苦であるのに、300 回はいうに及びません。」
「比丘よ。識触はこのように観察されるべきである。六道を輪廻する苦痛は、300 回刺された身体のように、日夜、苦痛の為に、忍び難い。このように観察すれば、識食の相続を断ずることができる。この相続を断ずれば、名色は、再び生じる事がない。名色が生じなければ、道は証せられて、為すことはなくなる。というのも、修正されるべきすべての事柄は、すでに完成されたが故に。」

16　根縁（Indriyapaccayo）

根には、統括するという意味が含まれる。この縁において、縁法は、その範囲内において、コントロール力を発揮して、縁生法を支える。根縁は、名と色の二つに、分けることができる。

一、色根

色根は、眼根、耳根、鼻根、舌根、身根と命根が含まれる。

前の五根は、それぞれ眼浄色（眼浄根とも言う。他は類推の事）、耳浄色、鼻浄色、舌浄色と身浄色と呼ぶ。根の一つひとつは、それぞれ、各自の領域を統括する。たとえば、眼根は、目で見える範囲だけを、統括し、耳で聞く事のできる範囲を、統括することはできない。前の五根は、それぞれに相応する所の、根識とその心所の根縁である。

それぞれが相応する所の根識とは何か？

たとえば、眼根に相応する根識は、眼識である；

耳根に相応する根識は、耳識である；

以下類推の事。

五根はまた、如何にして、それぞれ相応する所の、根識の心所の根縁となるのか？

識が生起する時、相応する心所もまた、同時に生起する為、心について語る時、必ず心所についても、語らなければならないのである。眼根は眼縁の力で以て、眼識へのコントロールを実行し、またその相応する所の心所を、コントロールする。たとえば、業が原因で、ある人が、生まれつき眼浄色が弱いとすると、目が物を見る時、曖昧模糊となってしまう。眼浄色は、その（＋己自身からくる所の）縁生法――眼識をコントロールして、物を見ても曖昧模糊となるようにする。同様に、ある人が、生まれつき耳浄色が敏感でないという事があるが、それは耳浄色が（＋己自身からくる所の）縁生法――耳識をコントロールしている為であり、この時、耳は聞こえにくくなる。鼻根、舌根と身根もまた同様に類する事ができる。

このように、色根縁はその範囲内において、そのコントロール力によって、縁生法を支えているのである。

命根色：命根は、その俱生した所の業生色の寿命を維持している。このように、命根色は縁法であり、それは食縁を通して、そのコントロール力によって、己自身と同時に存在する所の、一粒の色聚の中にある業生色、たとえば、目、耳、鼻、舌、身、性根及び心所依処等の、業生色聚の生命を支える。

有情一人一人の生命は、みな、この種の業生の命根によって維持されており、それがいったん終止するならば、これを「死亡」と言う。その時、身体は、生命力のない、一個の死体となる。

二、名根

名根は 12 個ある。すなわち；信、精進、念、定、慧（五修行の根）、楽、苦、悦、憂、捨（五受根）、意、未知当知根（＝未知の事を知る根）、最終知根と具最終知根である。

■１、信根

これを根と呼ぶのは、それが（＋対象を）コントロールする力を、擁しているからである。一人の人間の信心（=確信）が生起する時、その他の名色法をコントロールすることができる。

給孤独長者（Anāthapiṇḍika）は、富豪であった。ある日、彼が実家に帰った時、仏陀の名号を耳にした。彼が初めて仏陀の名号を耳にした時、全身に鳥肌が立ち、また非常に喜悦した。その時、彼は思った：

「この世間において、ただ仏陀の名号を聞くだけでも難しい事である。今、私には、仏陀の名号を聞く事のできる福報があった。私は必ずや、仏陀にお会いしなければならない」

その時すでに夕暮れで、仏陀の住まいはとても遠かった為、彼は、翌日の早朝に、仏陀に礼拝しに行こうと思った。夜中に彼は三度目が覚め、もう夜が明けたのだと思い、城門まで行った所、非人（＝人間でない有情）が、彼のために城門を、開けてくれた。城門を出るやいなや、光が消え失せ、一片の漆黒となった。彼は恐怖を覚え、身を翻して戻ろうとしたが、一人の夜叉が、戻ってはいけない、と励ました。彼の仏陀への信心が非常に強い、すなわち、信根が強い為、彼の信根が、その他の名色法をコントロールして、彼は二度と恐怖する事がなくなり、暗黒も即刻消失して、眼前は一片の光明となった。彼は、彼自身の信心から生じた所の光明によって、当時、世尊がお住まいになっていた禅林まで行った。

この物語は、信根が、その他の名色法をコントロールすることができるという事を、物語っている。ただ一たびそれが生起しさえすれば、それは先頭に立って（＋指導的役割を発揮して）、その他の名色法を、前進させる。五根は、その修行の過程において、非常に重要であり、バランスを保たねばならない。修行の過程において、信根は、必ず慧根とバランスを取らねばならず、精進根は定根とバランスを取らねばならない。アジアの仏教徒は、信根が超越的に強く、慧根が弱い。

その為、盲信しやすく、真正なる出家者が持っているべき品徳と能力を審査する能力に欠けており、安易に出家者、特に、彼らの幸福を祈願し、経を読み、看病し、吉祥物（＝数珠、お守りなど）をプレゼントする俗僧を、偏向して好む傾向がある。これらの信徒の偏向により、この種の俗僧が大いに増えているという現状は、非常に憂うべきものがある！

■2、精進根

精進根が生起する時、それは、その他の名色法をコントロールして、（＋全体の）指導者となる。

仏陀の時代、ある一群の比丘たちが、森の中に入って修行していた。彼らの規定は 3 つあって、それは、どのような事が発生しても、戒を誦する日以外は、各々各自で修行して、顔もあわさないし、話もしない、というものであった。その時期、その森では、虎が出没していた。ある日、虎が一人の比丘を、連れ去った。彼らには、上記三つの取り決めがあった為に、この比丘は、救命の叫び声を、上げなかった。

次の日、再び虎がやってきて、二人目の比丘を連れ去った・・・。戒を誦する日になって、尊者たちは、比丘の人数が減っている事に気が付き、不思議に思ったが、事情を解明する事ができなかった。その為彼らは約束した：

「もし、何か危険な事が起こったら、大声を出さねばならない。禁句してはいけない。」

次にまた虎がやってきて、一人の比丘を連れ去ろうとした。比丘は虎に咬まれたまま、大声で叫んだ

「助けて！助けて！虎だ！虎が来た！」

その他の比丘はそれを聞いて、棒を持って、比丘を救いに向かったが、虎の走るのが速く、比丘たちは、追いつく事ができないので、比丘に向かって言った：

「同修よ。我々は、あなたを救う事が出来ない。あなたは、己自身で、己自身を救いなさい。」

この比丘も覚悟した：

「私にはもはや、死ぬ道しか残されていない。私は、いまだ生きている内に、私に残されたわずかな時間を使って、勇猛果敢に修行する事ができたならば、臨終前に阿羅漢を証悟する事が出来るかもしれない。」

こうして、彼は精進力でもって、vipassana を修して、無常・苦・無我を観照した。

虎が、彼の心臓を食べようとした時、彼は阿羅漢を証悟したのである。

精進根が生起する時、それは、その他の名色法をコントロールして、目的地へ到達せしめる力を、持つ。精進根は、定根とバランスを保たねばならない。禅の修行において、精進が強すぎると、掉挙が生じる。たとえば、安般念の修習において、多くの人々は、

まるで戦いに行くかのように、全身が緊張している。その結果、瞬く間に鼻が硬直し、頭が膨張し（＋て不具合が生じるが）、これは避けるべきである。呼吸は微細になる為、修行者の心は柔軟でなければならず、修行者は、最もリラックスした状況の下で、呼吸を観じなければならない。このようにして初めて、両者は協調・調和することができる。弓で矢を引くように、目標物の距離は近いのであるから、軽く撃てばよいのであって、もし、あまりに力を用い過ぎれば、矢は目標を離れてしまうであろう。

■３、念根

四念処の修習をする時、身・心において生起しているすべての現象について、覚知する必要があるが、これらの過程を覚知する時、正念は、＜コントロール＞という働きをする。

■４、定根

止（サマタ）の修習の過程において、定根は俱生名法の範囲内で、根縁を通して、そのコントロール力でもって、縁生法――俱生名法を支える。たとえば、安般念を修習する時、定は心と心所を統一し、また出入息において、（＋心と心所を）コントロールして、それらにおいて、妄念が起きないよう、安定して、動揺しないようにする。通常、入定した場合、我々には（＋外部の）音が聞こえなくなる。たとえば、仏陀は入定していた時、仏陀の側で 500 台の牛車が河を渡って、非常に騒がしかったが、彼には何も聞こえなかった（＋という事があった）。

■5、慧根

慧根は、目標の無常・苦・無我を如実に知る（＋能力の事）を言う。それは、真正なる善知識を識別し、真なる法と偽の法の別を見極め、善と悪を区分する能力を、含む。生命が不如意な事柄に遭遇する時、智者はその智慧でもって、コントロールの力――如理作意を発揮して、善法である所の、縁生法の生起を支えることができる。

以下の小サーマネラ（＝小沙弥）の物語が、それを説明してくれる：
七歳の男の子が、父親の懇願により出家して、小サーマネラになった。剃髪する前に、男の子は、先に、観禅の指導を受けた。剃髪する時、彼は観禅（＋の目標）に専注し、この観禅と、前世の善業のおかげで、剃髪した後、聖果を得た。その後、彼の戒師――ティッサ尊者が、彼と共に、仏陀に礼拝する為に、サーワッティの町に出かけた。
途中、彼らは、ある村の精舎で一泊した。尊者が入眠した後、小サーマネラは、尊者の傍らにいて坐禅し、明け方少し眠った。

二日目の朝、ティッサ尊者は、小サーマネラを起そうと思って、扇子を投げた。不幸な事に、扇子の柄が、小サーマネラの目を打ち、目が見えなくなった。小サーマネラは、片手で傷ついた目を押さえて、水を汲んで来て、ティッサ尊者に洗顔してもらい、ついでに、床も拭いておこうと思った。彼が尊者に片手で水を差しだした所、尊者は彼に注意した。他人に奉仕する時は、両手で行うべきであり、片手ではいけない、と。その時、尊者は初めて、己自身の過失によって、小サーマネラが、失明している事に気が付いた。

尊者は、刹那に、小サーマネラは、高貴な人物である事を悟って、自分を非常に恥ずかしく思い、その場で土下座し、許しを乞うた。小サーマネラは、彼に優しく言った。この事は尊者の過失でもなく、己の過失でもない。これは輪廻の過失である。故に、尊者はこのことで悲しむ必要はない、と。
小サーマネラは、己の慧根によって、相応する名法を導いて、輪廻の禍を思惟し、善法を生起させる事ができた。Vipassana を修習する時、慧根は、そのコントロール力を発揮し、その俱生名法が、目標における「無常・苦・無我」を、専注できるようにする。

17　禅縁（Jhānapaccayo）

この縁の縁法は、縁生法をして、緊密に目標を観察せしめるものである。
この縁法は七禅支であり、縁生法は、禅支と相応する所の心と心所である（二つの五識を除く）。縁法である所の七禅支は、尋、伺、喜、楽、一境性、憂と捨である。楽、憂と捨禅支は、受心所に属する為、故に、七禅支とは言いながら、実際には、五種類の心所しかない、と言える。定の修習において、尋、伺、喜、楽、一境性は初禅の五禅支であり、善に属する。

（一）尋禅支は、禅縁を通して、縁生法が目標を緊密に観察するのを支える。
例えば、我々が安般念を修する時、縁法は尋であり、尋は、心をば、呼吸の上に安置させるものである。もし、心を、呼吸の上に安置しないのであれば、心に妄念が生じる。故に、尋とは、心をして目標に安置せしめ、妄念を起さないようにする（＋義がある）。

（二）伺禅支は、ひたすら注意力を呼吸の上に安置し、目標を密接に観察する事を言う。尋は、心を初めて目標に安置するが、伺は、ひたすらに、心を目標の上に安置させる事を言う。この二つは共に、密接に目標を観察するもの（=作用を持つもの）であるが、それはどのような縁を通してであるか？　　禅縁である。

（三）喜禅支とは、目標を非常に好む事を言う。ただ目標を好む時にのみ、心は目標の上に、留まることができる。

（四）楽禅支は、目標の内に楽を感じる事を言う。心が目標に専注する時、楽受が生じる。楽受がある時、我々は禅の修行において、長時間坐る事ができる。もし、まったくの苦受しかないのであれば、我々は、長時間座る事ができない。

（五）一境性禅支は、すべての名法を統一し、それらをバランスして、安般念の呼吸の上に安住せしめる。もし、一境性禅支が、すべての名法を統一する事がないならば、それらは四散する為、心は散乱する。こういう事から、それはすべての名法を、呼吸の上において統一し、心を集中せしめる。（＋我々の心は）集中して、初めて、力が発揮できる。

（六）憂禅支は不善心所であり、瞋根心と相応する。たとえば、我々の心が、敵の事を思って懊悩する時、憂禅支において、その相応する心と心所は、敵の事を緊密に、思惟し続ける事になる。

（七）捨禅支は、善である場合も、不善である場合もあり得る。一人の人間が、五禅支まで証得する事が出来た時、捨禅支は、その相応する所の、心と心所を平捨して、目標を密接に観察する。捨禅支は、どのようにして、不善心と相応するのか？
一人の猟師が、平捨（＋の心）で獲物を狙い、尋、伺、喜、一境性でもって、彼の心を目標に集中させる、この時だけ、彼の受は捨受である、と言う。

上述の事から、禅は、心を所縁の境に、専注させる事であることが分かる。通常、定を修する時に言う所の五禅支は、善に属する。しかし、禅支はまた、不善である事もあり得る。たとえば、我々が映画を見る時、尋と伺は、常に我々の心をして、映画の中の情景を追わせしめる；喜禅支は、映画の情景に興味をもたしめる；楽禅支は、心をして、映画を楽しむようにせしめる；一境性禅支は、映画の情景に対して、心をして、非常に専注せしめ、心をして、その中に、沈潜せしめる。
五禅支は、我々をして、善業を為す時、または不善業を為す時に、精神を集中せしめるもので、それらが欠乏する時、善もまた、効率よく実行する事は出来ない。以下は《法句経》にある物語であるが、上記の事柄を、明確に物語っているものである。

僧加羅仕達は、サーワッティ町の、長老比丘であった。彼の甥も、出家して比丘になった。ある時、この年若い比丘は、二枚の袈裟を手に入れた。彼はそのうちの一枚を叔父に上げようと決めた。彼が、袈裟を長老比丘に差し上げた時、長老比丘は、己の袈裟

はもう十分に足りているといって、受け取るのを拒否した。甥が悲しまないようにと思って、長老比丘は、年若い比丘に、うちわで風を送って貰うよう頼んだ。しかし、甥は、長老が彼の事を嫌っているのだと誤解して、還俗して、世俗の生活を送ろうと、考えた。

その時より、彼の心念は、バラバラになり、情緒は混乱し、心中で思った：還俗した後、この袈裟を売ってしまい、メスのヤギを買い、そしてそれを速くに育て上げれば、十分な収入になるに違いない。妻をめとって子が生まれたら、妻子を連れて叔父に会いにこよう。その道々で、私は妻に、子供の面倒は自分がみると言うだろうが、妻は、彼に牛車を御して欲しいと頼み、子供は自分がみると言う（＋だろう）。そうやって、二人で争っている内に、子供が牛車から落ちて、車輪にひかれたので、彼は非常に怒って、妻の頭を棒でたたいた。実際、この時、彼はまさに叔父のために、うちわを動かしていたにすぎず、彼が妄想を繰り広げた為に、なんと、長老比丘の頭を叩いてしまった！五禅支が欠けている為に、この年若い比丘は、うちわであおぐ、という簡単な仕事さえも、円満に完成する事ができないのであった。

18　道縁（Maggapaccayo）

この縁の縁法は、縁生法をして、ある種の目的に到達する事ができるよう、その道となるものである。道とはすなわち、ある種の目的地に通ずる、通路の事である。道は、合計 12 種類あり、それは八つの正道と、四つの邪道を含む。八正道は正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念と正定である。それが「道」と呼ばれる理由は、それらが善趣に至るか、または涅槃に至る通路である為である。故に、道縁という。四つの邪道は、悪道に到達する通路であって、それは邪見、邪思惟、邪精進と邪定が含まれる。

一、八正道

■１、正見

八正道の内、最初に来るのは、正見である。正見とは何か？　正見とは、徹底的に四聖諦を知ることである。これは非常に重要な事柄である。勿論、正見は、非常に多くのレベルに分けることができる。たとえば、最も基本的なものは、因縁果報を徹底的に知ることである。

一人の人間が、徹底的に因縁・果報を知る時、その時初めて、なぜ善を行い、悪を止めなければならないのかを、知ることができる。もし、因果応報の正見を持たないのであれば、彼は善をなす事に汲々とせず、悪を避ける事にも汲々としない。故に、正見は先導であり、それは人をして、正しい方向へ向かわせるものである、と言うのである。徹底的に四聖諦を正見して、知るという事は、どういう事であるか？　苦・集・滅・道。

第一、苦諦。
苦諦とは何か？　　《大念処経》において、仏陀は言う：
「生（＝生まれる事）は苦であり、老（＝老いる事）は苦であり、死は苦であり、愁、悲、苦、憂、悩は苦であり、怨憎会は苦であり、愛別離は苦であり、求めるを得られないのは苦である。簡単に言えば、五取蘊はすなわち苦である」

仏陀はなぜ、五取蘊は苦諦であると言うのか？
五取蘊は、時々刻々変化し、かつ、生・滅しているのであるが、しかし、無明は、その真相を知らず、却って五蘊は楽しいものであると誤解させ、貪愛によって、五蘊を、強烈に執着するようになる。五蘊とは色、受、想、行、識である。
我々はどのような煩悩を通して、五取蘊に執着するのであろうか？
まず、我々は「貪愛」によって、五蘊を「私のもの」と執着する――身体は「私の」であり、感受は「私の」であり、標記と記憶（想蘊）は「私の」であり、業を造る行動（行蘊）は「私の」であり、心識は「私の」である（＋と執着する）。

その後に、我々は、「有身見」によってそれらを「私の自我、私のもの（atta）」として執着する――身体は「私の自我、私のもの」、感受は「私の自我、私のもの」、想蘊は「私の自我、私のもの」、行蘊は「私の自我、私のもの」、心識は「私の自我、私のもの」であるという風に。このように、我々は二種類の錯誤によって五蘊に執着するのである――第一番目は、貪愛を通して、それを「私の」と執着し、二番目には、有身見を通して、それらを「私である」と執着するのである。

第二、集諦――苦の起因。
苦の起因には三種類ある：「欲愛、有愛、無有愛」
欲愛とは、五欲の享受に執着する事；有愛とは、生命の存在に執着する事であり、これは（＋上記より）更に強烈なる愛である；衆生は、輪廻から離れたいとは、思ってはいない。というのも、衆生は、生命に執着しており、天界に生まれたいと執着しており、天界の楽しみを楽しみたいと執着しており、または人間に生まれたい、梵天人に生まれたい、と執着しているのである。

有愛と常見は相応しており、同一の人物が輪廻していると思っている（＋事を言う）。無有愛と断見は相応しており、人が死ぬと何もかも終わりであると考え、因果応報も認めない、断見と相応する所の、一種の貪愛である。これらは皆、苦痛の原因である。

第三、滅諦――痛苦の止息。
滅諦とは何か？
貪愛が苦の因であるならば、滅諦とは、貪愛の滅であり、すなわち、涅槃である。

第四、道諦――苦の滅に向かう道。
道諦とはすなわち、八正道――正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念と正定である。

この四聖諦を理解する事は、すなわち、正見を持つことである；正見を得るためには、四聖諦を理解しなければならない。四聖諦は仏法全体の中心であり、仏陀が初めて法輪を転動した時、開示したのが四聖諦である。

■2、正思惟
正思惟には以下の三種類がある：
（１）出離思惟
（２）無瞋思惟
（３）無害思惟。

出離思惟――我々は、感官の欲楽の禍について、深く考えて、出離思惟を発展させる必要がある以外に、また、一個の”私”が、これらの楽欲を享受しているのだ、という観念を”放棄”する（すなわち、無我）事に、チャレンジしてみる必要もある。
出離思惟は、以下の考えから遠く離れる事を意味する：私は、大きな家、大きな車、美人の妻、私の名誉と利益、私の高収入、私の社会的地位などなどを手に入れたい、という考え。これら、”私の所有する所のもの”というこの概念を、しっかりと握りしめて、それらに執着する考え方は、欲楽への渇愛を極度に強化し、人をして渇愛から離れなくさせる。

ジャーナに入る事もまた、出離思惟と見做される。というのも、心がジャーナに専注する時、感官の欲楽と関連する所の考えは、暫定的に放棄されるが故に。まさに仏陀が言うように：
「定が展開される時、心もまた展開される；心が展開される時、激情は取り除かれる。」のである。

無瞋思惟――敵意（瞋恨心）のない考え方。
　この種の高尚な心理に到達する為に、我々は慈心について、深く思惟しなければならない。常々、他人が身・心の苦痛から遠く離れる事を祈願し、他人の平和と楽しさを祈願する事。周囲の人々が楽しい時、我々もまた、楽しくなる。

無害思惟――他人を虐待しようとする、残虐な思惟がない事。一人の人間が、正しく”無害思惟”　を育成したい思うならば、一切の衆生への憐憫と同情の心を育成しなければならない。一人の人間が、他人の身が、痛苦の中にある事を見たならば、憐憫の情は油然として生じるし、悲心の生起は、人をして”心を揺り動かす”事になり、また、己の支援を通して、他人の苦痛が軽減できるよう、願うものである。

■3、正語
正語には、四種類ある：不妄語、不両舌、不悪口、不綺語。

■4、正業
正業には、三種類ある：不殺生、不偸盗、不邪淫。

■5、正命
正命には、五種類ある：
武器の売買をしない。
他人が殺した動物を売買したり、提供したりしない。
酒類の売買をしない。
毒薬の売買をしない。
人間の売買をしない。
これらの不当な職業は、毒を持つ心を強化し、他人を害し、世界を暗闇と混乱に陥れる為、非難されるべきものである。

■6、正精進
正精進には四種類ある：
（1）未生の悪は生じさせない
（2）已生の悪は断じ除く
（3）未生の善を生じさせる
（4）已生の善は円満にする。

　私は、この四種類の正精進について、詳細に解説したいと思う。なぜならば、それらは、すべての成就の基本・基幹であるが故に。

（1）未生の悪を生じさせない

根門を守護して、未生の悪法が生起するのを、防止する。

いわゆる根門の守護とは、目、耳、鼻等の根門をすべて締め切って、見ない、聞かない、いう事を意味するのではなく、行・住・坐・臥において、一個の業処を守る事を言う。心が、一個の禅修業処を専注する時、たとえ目が美しい物を見ていても、視ているようで、見ていないという風になる；耳は、貪を引き起す妙なる音が耳に届いて、聞こえたとても、聴いていない風になる。心が業処に専注する時、煩悩は目、耳、鼻、舌、身、意から入って来る事ができない。このようにする事によって我々は、色、音（声）、香、味、触が、目、鼻、舌、身、意を打つことによって生じる、貪・瞋・痴など等を防止することができる。

この事に関して、仏陀は亀と狐のたとえ話をしている。岸辺に亀がいて、頭と四肢を甲羅から出していた。ちょうどその時、近くに狐がいて、食べ物を探していた。狐は、亀のいる事に気が付いて、亀を食べようとして、早速、亀に近づいて来た。聡明な亀は、狐を見ると、四肢と頭を甲羅の中に仕舞いこんだ。

狐は思った：

「よし！私はここで待っていよう。亀が手足を出した時、私は亀を食べてしまおう」

狐は亀の傍で待っていた。

亀は思った：

「よし！私とお前、どっちが我慢強いか、比べてみよう」

狐は長い時間待ったが、亀は決して手足を出す事はなかった。狐は退屈して、どこかへ行ってしまった。

狐は我々の煩悩のようで、一たび我々が五根を緩めると、心は、煩悩に咬まれてしまう。心は、所縁に悦びを感じ、外塵（六所縁）に触れるや否や、即刻、貪・瞋・痴を生起せしめる。もし、心が、一個の業処を守らないのであれば、煩悩は目、耳、鼻、舌、身を通して、我々に攻撃をかけてくる。これが「根門を守護する」という意味である。根門を守護する事によって初めて、未生の悪法の生起するのを防ぐことができるのである。

（2）已に生じた悪は断じ除く

もし、悪法が已に生起したのであるならば、正しい方法を運用して、取り除かねばならない。たとえば、あなたは車を買ったとする。あなたは新車に対して、非常に執着している。ある日、あなたが執着するその新車がぶつけられて、あなたは懊悩する。この時、悪法は生起するが、瞋恨というこの悪法を断じ除くために、あなたは如理作意を実践しなければならない。

車は無常なる法であり、生・滅の法であり、それは四大によって構成されており、あまり執着する必要はない、と作意する。これが、悪を断じ除く一つの方法である。もし、あなたが誰かに怒りを感じていると、悪法が生起する。怒りを対治する方法は、慈愛を送る事である。また、あなたは以下のように観じる事もできる：
「私の心に怒りが生じるやいなや、多くの瞋恨の速行心が過ぎ去って行った。それは今生の受業、次の生の受業、無尽の業を残す。これは恐ろしい事である！己の瞋恨は、コントロール（制御）した方がよい。」と。
このようにすれば、あなたは瞋恚を取り除くことができる。この種の観想もまた、如理作意と言う。

仏陀が、いまだ正覚を成していない菩薩であった時、彼がいかにして精進して、生起した憂慮と恐怖を降伏したか、という話を述べた。彼は言う：
「私が歩いている時、恐怖が訪れた。私は立ち止まらず、座らず、横にならず、歩きながら、＜今・ここ＞において、恐怖を取り除いた。
私が立っている時に、恐怖が訪れた。私は歩かず、座らず、横にならず、立ったまま、＜今・ここ＞において、恐怖を取り除いた。
私が座っている時、恐怖が訪れた。私は横にならず、立ち止まらず、歩かず、座ったまま、＜今・ここ＞において、恐怖を取り除いた。
私が横になっている時、恐怖が訪れた。私は座らず、立ち止まらず、歩かず、横になったまま、＜今・ここ＞において、恐怖を取り除いた。
《中部》

もし”正精進”がないならば、一人の人間は、痛苦から解脱する事はできない。そういうことであるから、悪念が心中に生起したまさにその時、”正精進”によって、それらを放棄し、駆逐し、取り除く事は、非常に重要である。もし、（＋悪法が）瞬時に発見されて、コントロール（制御）されないのであれば、煩悩は力を蓄える為、それを克服する事は、難しくなる。この種の力は、更に強化されて、我々の後天の性格になってしまうのである。

（３）未だ生じない善を生じせしめる
我々には、非常に多くの、いまだ生起していない善法がある。たとえば、五戒を受持していない人ならば、未だ生じない善法は、五戒であると言える；いまだ布施をした事のない人ならば、布施が、未だ生じない善法になる。我々には、20 種類の善法があるが、それは、身口意の 10 種類、布施、持戒、禅の修行、弘法、回向等の種々の善業である。

もし、いまだそれが生起していないのであれば、精進を励起して、それらを生起させなければならない。いまだ生起しない定を生起させるためには、止（＝サマタ）を修しなければならない；いまだ生起しない慧を生起させるためには、vipassana を修しなければならない。

（4）すでに生起した善を円満する

最後の正精進は、我々が、己自身の戒・定・慧を完成させる事である。あなたがもし、すでに持戒しており、戒を破らないのであれば、善法は円満する。もし、定を修しているのであれば、今の所、呼吸に専注できるのは 5 分であったとしても、10 分、20 分と、専注に精進する事を継続して実践し、やがて、禅相が鼻孔の周囲に出現するならば、次に心を禅相に沈潜させて、安般念の初禅、二禅、三禅、四禅に至れば、安般念を円満することができる。

もし、智慧を円満させたいのであれば、行法の無常・苦・無我を持続的に観照して、異なるレベルでの vipassana（観智）を体験しなければならないが、心が二度と再び、それら（五蘊）に対して幻想を抱かないようになるまで、五蘊の生・滅を体験・証悟し、最終的には、それらに執着する事のない解脱――涅槃を獲得しなければならない。
阿羅漢道果を証悟する事は、已に生じた善の、最終的な円満・成就である。

■7、正念

正念の意味は、しっかりと覚えておく事、忘れない事であり、それ（正念）は、身、受、心、法を不断に観照する事によって、育成される。身、受、心、法の四念処は、正念を育成する場所である。四念処とは：
身念処（身体の観察～安般念を含む）、
受念処（苦受、楽受、不苦不楽受の観察）、
心念処（心の異なる状態の観察。例えば心に欲望がある、心に瞋恚がある、心が委縮する、心が散乱するなどなど）、
法念処（五蓋の観察、四聖諦、七覚支等）。
身、受、心、法は正念を打ち立てるのに必要な基礎であり、それらを観照する事を通して、智慧を誘発することができる。

■8、正定

正定には、心を所縁の上において、心を統一する作用がある。正定とは、一種の（＋心の）状態――すべての心と心所を集合して、それらを一個の具体的な目標（たとえば、呼吸）に向かわせ、かつ、一定の時間専注を維持する事を通して、心の力を強化し、育成するものである、と言える。この時、心は、情欲から遠く離れ、五蓋から遠く離れて

いるため、有尋、有伺、喜、楽、一境性五禅支を獲得することができるが、これを初禅に安住すると言う。正定は、初禅、二禅、三禅及び四禅を含む。簡単に言えば、八正道は、涅槃へ向かう通路である。我々は、痛苦から解脱したいのであれば、必ず、痛苦から解脱する為の道は、どのようになっているのかを、知らなければならない。もし、痛苦から解脱する為の道の、歩き方を知らないのであれば、茫々として、さ迷い歩かねばならないのである。

二、四邪道

■１、邪見

　邪見には非常に多くの種類がある。たとえば、因果を信じない（無因見）、断見、常見など等である。通常、多くの人々は常見を持っている。常見とは、この生死輪廻の中で、一つの永恒なる霊魂がが、一つの世からもう一つの世に漂泊するのだという考えである。言い換えれば、我々は同一の個人が、この一世から、別の一世に漂っていくのだと考えている。私は思う。仏教徒を含む非常に多くの人々が、この種の常見を持っているに違いない。

なぜであるか？　　それは、我々が、未だ、無我をば徹底的に理解していない為であり、衆生はただ名・色によって構成されたものに過ぎない事を知らない為であり、名・色は不断に生・滅している事を知らない為である。生命とは、一連の不断に生・滅する所の過程に過ぎないのに、我々はそれの過程において、永恒なる私がいると誤解してしまう。これが常見の発生の因である。断見とは、人が死ぬと、生命も断滅し、輪廻しないという考えである。

■2、邪思惟

邪思惟とは、正思惟の反対で、邪思惟には三種類ある：

欲楽思惟、

瞋恨思惟、

暴虐思惟。

欲楽思惟は、享楽を捨て去る事ができず、心中は欲楽のことばかり考えるか、または欲楽に向かうか、欲楽を綿々と懐かしむ事を言う。

瞋恨思惟は、心中に、常に他人への恨み心を抱え、瞋恨心を持つことを言う。

暴虐思惟は、心中に常に、どのようにして他人を虐めるかを考えているものを言う。

■3、邪精進

正精進の反対。

正精進は、未だ生じない悪は生じせしめない。

邪精進は、未だ生じない悪を生じせしめる。
正精進は、已に生じた悪を断じ除く。
邪精進は、已に生じた悪を成長させる。
正精進は、未だ生じない善を生じせしめる。
邪精進は、未だ生じない善を生じせしめない。
正精進は、已に生じた善を円満させる。
邪精進は、已に生じた善を断じ除く。
精進力を反対の方向に使ってしまう時、その作用は不善を滋養し、善を断じ除いてしまう。

■4、邪定
もし、一人の人間の、その人の取る目標が邪悪であり、錯誤したものであるならば、彼の育成するものは邪定である。
たとえば、一人の人間が、精神を集中させて、槍を持って、他人（＋の急所）に標準を合わせるならば、これは邪定であると言える。
邪見、邪思惟、邪精進と邪定は、すべて、四悪道の道縁である。

19　相応縁（Sampayuttapaccayo）

この縁は、縁法に属する所の名法が、縁生法に属する名法を、生起させるものである。この縁法は名法であり、縁生法もまた名法である。二者は、分離する事のできない、相応する所の、一個のグループとして、同時に生起する。当該のグループの特徴は、同時に生じ、同時に滅する事で、同一の目標を擁し、また、同一の依処を擁している。
この縁において、もし、どれか一つの名法をば、縁法であるとする時、その他の相応する名法は、縁生法となる。

我々はすでに、心は、単独では生起する事ができない、必ず、心所と共に、同時に生起しなければならないのだ、という事を説明した。もし、心が縁法であるならば、それに相応する心所は縁生法と呼ばれる；もし、心所が縁法であれば、それに相応する心は、縁生法となる。

たとえば、美味なる味が舌根を打つとき、舌識が生じる。舌識の生起は、相応する七つの一切心心所を生起せしめるが、その七つの心所とは、以下の通りである；
１、触――味、舌根と舌識を、連結させる。
２、受――味の喜ばしさを体験する。
３、想――味が甘いか、酸っぱいか、苦いか、を標識する。または、味が、常であるとか、楽であるとかを、標識する。
４、一境性――触、受、想・・・等の相応する名法を統一して、味に対して、集中させる。
５、名法命根――相応する名法の生命を維持して、各自が、各々の任務を、遂行できるようにする。
６、作意――心を誘導して、すべての相応する名法を、味に向かわせる。
７、思――二つの作用がある。

一番目は、己自身の貪を成す業である。
二番目は、その他の相応する名法を指揮して、己自身の作用を執行する事である。たとえば、「触」を指揮して、味と、舌根と、識を連結させる；「受」を指揮して、急いで、味の喜ばしさを、体験せしめる；「想」を指揮して、味の標識をする。「一境性」を指揮して、相応の名法を急ぎ統一して、目標に集中する；また「名法命根」を指揮して、相応する名法の生命を維持する；また「作意」を指揮して、すべての相応する所の名法を、目標に向かって誘導する。
【ここにおいて、舌識は縁法であり、その他の相応する名法――七つの遍一切心心所は、すなわち、縁生法である；縁力は相応縁である】

相応縁は、四つの条件を満足しなければならない。：同時に生じ、同時に滅し、同一の所縁、同一の依処でなければならない。この四つの条件は、心王と心所の相応する所の条件でもある。すべての心と心所は皆、同時に生じ、同時に滅し、同一の所縁、同一の依処によるものでなければならない。
上述の例を参考に考察するに、舌識が生起すると、相応する心所もまた、同時に生起する；舌識が生起すると、相応する心所は、同時に滅し去る；舌識と相応する心所はみな、味を所縁としている；それらの依処は、すべて、舌根である。心と色法が同時に生起する事はあるが、それらが、同時に滅する事はない。故に、それらは不相応である。
ただ心と心所、名法と名法のみが、相応縁となる。

20　不相応縁（Vippayuttapaccayo）

この縁において、その縁法は、現在色法を支える名法であるか、または、その縁法は、現在名法を支える色法である。これは相応縁と正反対（＋の現象）になる。相応縁の中の縁法と縁生法は、必ずや、名法でなければならず、色法は含まれない。不相応縁は、もし縁法が名法であれば、縁生法は色法でなければならない；もし縁法が色法であれば、縁生法は必ずや、名法でなければならない。すなわち、この縁の縁法と縁生法の両者は、必ず、異なった種類に属していなければならない。

もし、その中の一つが色法であれば、もう一つは必ず、名法である；その中の一つが名法であれば、もう一つは必ず、色法でなければならない。これはちょうど、水と油を混ぜた時に、同じところに置いてあるとは言いながらも、依然として分離を保っているようなものである。色蘊と四つの名蘊（受、想、行、識）は、同時に生じる事はあり得るが、同時に滅することはない。また（＋それらはお互いに）、依処、所縁も異なるが故に、不相応縁と言う。

色法の寿命は、17 個の心識刹那である。心と色法は、同時に生起する事はできるが、しかし、滅し去る時間が異なっている。色法が滅し去る時、すでに、17 個の心が滅し去っている。それらの依処も異なる。色法自体は、名法の依処である。たとえば、眼識は眼浄色に依存して生起するが、眼浄色は地・水・火・風によって生じる為、それらはお互いに、依処が根本的に異なっているのだ、と言える。それらの所縁も異なっており、色法は所縁を知ることはできず、ただ名法のみが、所縁を知ることができる。この種（＋の関係性）を、不相応縁と言う。

結生の時、心所依処と諸々の名蘊は同時に生起するが、お互いにとっては、不相応縁となる。これはそれらが色法と名法に属するが故である；また、結生するその瞬間において、結生識は心識であり、心所依処と同時に生じるとは言え、心所依処の寿命は、結生識より長い為、結生識と同時に滅するという事はなく、故に（＋この種の関係性を）不相応縁と言う。

21＆24　有縁と不離去縁（Atthipaccayo＆Avigatapaccayo）

この二つの縁は、内包される意味は同じであるが、ただ、名称が異なる。この縁においては、縁法が縁生法の生起を支えるか、または、（＋縁法が）縁生法と同時に存在する間、縁生法が継続して存在できるように（＋縁法がそれを）支える。たとえば、四大の内の一つは地大であるが、地大が生起する時、それは、その他の三大「水・火・風」が同時に生起するよう、支援する。この時、地は縁法であり、その他の三つは縁生法となる。
何の縁を通してか？　　有縁である。四大は同時に存在し、お互いに分離することができない。心が生起すると、有縁の縁力を通して、それは縁生法――相応する心所が生起するのを支える。

心と心所は、有縁に属し、かつ、俱生縁、相互縁、依止縁でもある。心が生起すると、心所もまた、同時に生起する。故に、それらは同時に存在する力によって、相互に支え合うのである。四大は俱生法であり、心と心所もまた、俱生法である。ただし、有縁においては、縁法と縁生法は、必ずしも、俱生法でなければならない、という事はない；必要な事柄は、唯一、この両者が、暫定的に、重複して（＝重なって）存在する時間があるかどうか、及び、縁法がそれらが重複する時に、ある種の方式でもって、縁生法を支援するかどうか、が問われるのである。

このように、有縁は、前生、後生及び俱生法を、含むのである。例を挙げると、ある女性の目に、人を迷わせる色所縁が映った時、たとえば、宝石等であるが、その時、眼識（見えた）が生まれる。眼識が滅し去ると、次に、領受、推度と確定心が生起し、確定心が滅し去った後、七つの貪欲速行心が生起する。色所縁の寿命は、名法の 17 個心識であるから、色法の存在（有縁）は、それを目標とする一系列の心識と心所をば、眼門心路過程を通して生起せしめるのである（所縁前生有縁）。
【ここにおいて、縁法――色所縁、縁生法の支え――（＋によって）眼門心路過程心と心所は生起し、かつ縁生法と同時に存在する時間内において、縁生法の継続的な存在を支援する】

我々は、一つの例を挙げてみようと思う。我々凡夫の心内には、潜在的な煩悩――有身見が存在しているが、この煩悩は、継続的に、我々に随伴している。我々は善い事をした時も、悪い事をした時も、有身見は、それ（”善行乃至不善行”）をば、”自我（atta、自分のもの）”と見做してしまう。たとえば、あなたは凶行を行っている悪党を打倒したとする。あなたは非常に喜んで言うに違いない：
「私は今日、ひとつ善い事をした！」

そして「それをしたのは”私である”」という考え、思いに、強烈に執着する。
またはあなたが、酒に酔って、朦朧としながら、女性にセクハラをしたとしよう。
目が覚めて、あなたは意気消沈して言う：
「私は間違いを犯した。私は許しがたい間違いを犯した！」と。
そして、”私が”　という考え、思いによって、大いに苦悩するに違いない。善行であっても、不善行であっても、有身見は、それらを”我がなした”　という考えに、転換してしまうのである。
【ここにおいて、有身見は縁法であり、一切の　”それは私である（それは私のものである）”　という発想は、縁生法である。有身見は、有縁（因縁有縁）の縁力の支えを通して、”それは私である、それは私のものである”という考え、思いを継続的に存在させる】

有縁は合計五種類ある：
俱生有縁、
前生有縁、
後生有縁、
食有縁と
根（色命根）有縁である。
実際は、有縁は、各種の異なる縁を、含むものである。この点に関しては、次頁において、グループ分けの説明をする時に、明確になると思われる。不離去縁は、有縁に似ている。二者の違いは、有縁は法の生・住・滅の過程を支えるのに対し、不離去縁は、法の生・住・滅の過程の中で、完全に去る前に、支援を与える事である。

22&23　無有縁と離去縁（Natthipaccayo　&　Vigatapaccayo）

　無有縁と離去縁は、同じ意味である。それらは性質を同じくする一対であり、名前が異なる所の縁である。無有縁は、名法が滅尽した後、その他の名法が機会を得て、その後に生起することができるようにする。それら（名法）が滅し去った後、「ない」という力によって、縁生法を支える為に、それは無有縁と呼ばれる。色塵が眼根を打つとき、眼門心路過程――一系列の条理の整った、認識過程が生じる。色塵が眼根を打つとき、一個の過去有分が生起して、滅する。

過去有分の滅は、「無有縁」の縁力を通して、二番目の有分波動が機会を得て、それの後に生起する事ができるようにする；ここにおいて、有分波動は縁生法である（＋事が分かる）。有分波動が滅すると、第三番目の心――有分断――がそれの後に、機会を得て、その後に生起できるようにする；有分断が滅すると、もうひとつ別の心――五門転向が、機会を得て、その後に生起できるようにする。五門転向心が滅した後、もう一つ別の心――眼識――が、それの後に、機会を得て、その後に生起できるようにする；眼識が滅すると、領受心が生起するが、領受心の生起は、眼識の滅する事または「無有縁」を縁としている。ここでの領受心は、縁生法である；以下類推の事。

無有縁と無間縁の性質は同じであって、それはみな、名法が滅尽した後、その他の名法が機会を得て、それの後に生起できるようにするものである。間に間隔というものがなく、無有縁はただ「不存在」でもって、縁生法を支えるのである。離去縁は名法の去る事が、その他の名法に機会を与えて、それの後に（＋名法が）生起するのを言う。たとえば、大統領の着任に関して、前の大統領が辞めない限り、次の大統領が着任できない、のと同じである。同様に、二つの心は、同時に生起する事はない為、一個の心が滅して後初めて、もう一つの心が、生起することができるのである。

24 縁グループ分類

24 の縁は、四種類のグループに、分類することができる：
（一）所縁縁。
（二）親依止縁。
（三）業縁。
（四）有縁。

一、所縁縁
たとえば、増上縁には二種類ある：所縁増上縁と俱生増上縁であるが、所縁増上縁はまた、所縁縁に帰納する事ができる。例を挙げると、あなたがどこかの寺院の住職が、阿羅漢であると聞いた時、あなたの心は、この尊い所縁に引き付けられて、あなたは彼に、礼拝しに行こうと思う。この強烈な考えは、あなたの身体を揺り動かして、彼に会いに行かせる。これは、所縁増上縁である。所縁増上縁は、所縁縁に帰納できるばかりでなく、所縁親依止縁のグループにも、入れることもできる。また、前生縁の中の、所縁前生縁もまた、所縁縁に帰納することができる。

二、親依止縁

一個の心が生起して、滅した後、もう一つ別の心が、それに密着するようにして生起するようにするのが無間縁である；後心の生起は、前心の滅に依存している為、これを無間親依止縁と言う。故に、無間縁または無間縁もまた、親依止縁内に含めることができる。数数修習縁は、何度も重複することによって、後ろの心が更に力を得るようになるものを言う。無有縁と離去縁は、前心が滅した後初めて、後ろの心が生起することができるのを言う。後心の生起は、前心の滅に依止している為、親依止縁に帰納することができる。

三、業縁

業縁の帰納は、比較的単純である。業縁には二種類ある：異刹那業縁と、俱生業縁であ。異刹那業縁は業縁に帰納することができ、それが非常に強い時は、親依止縁に帰納することができる。俱生業縁は、有縁に帰納する。

四、有縁

多くの縁は、みな、有縁に帰納することができる。それは：俱生縁、依止縁、食縁、根縁、ジャーナ縁、道縁、相応縁などである。

■諸縁の分類

（一）所縁縁

◎所縁増上　◎依処所縁一前生依止

◎所縁前生　◎不相応

（二）親依止縁

◎所縁増上　◎依処所縁――前生依処

◎所縁前生　◎異刹那業

◎不相応　　◎無間

◎相続　　◎重複

◎無有　　◎離去

（三）業縁

◎異刹那業

（四）有縁

◎所縁増上　◎俱生増上

◎俱生依止　◎依処前生依止

◎依処所縁――前生依止

◎依処前生　◎俱生業

◎不相応　　◎因
◎俱生　　◎相互
◎果報　　◎食
◎根　　◎ジャーナ
◎道　　◎相応
◎不離去　　◎後生

略説縁起第一支――無明縁行
今、我々は発趣論の各種の縁力を用いて、12　因縁を、説明したいと思う。ここにおいて、我々は、縁起の第一支――「無明縁行」、すなわち「無明の縁によりて、行が生起する」という、この過程は、どのような縁力によって生じるのかという事を、簡単に説明したいと思う。
「見縁起者、見仏；見仏者、見縁起」
（縁起を見る者は、仏を見；仏を見る者は、縁起を見る）
縁起（paṭiccasamuppāda）は、仏教においては非常に重要であり、徹底的に、縁起とは何かを理解して初めて、「無我」とは何かを知ることができる。「無我」の意味は、一切の現象はみな因と縁の和合に依っていて、主宰（＋者）はいない、という事である。一切の現象が、みな因と縁の和合に過ぎない事を理解したならば、「我見（我ありという思い）」は自然に破壊される。故に、無我を理解したいのであれば、必ず縁起を研究しなければならない。

縁起は、また、12 縁起とも言う。縁起の法とは、基本的には、生死輪廻の因・縁構造を理解する事であり、衆生が生死輪廻の中において、この世からあの世へと転生する、その諸縁を開顕するものである。ここにおいて、衆生とは、世俗諦であり、方便の説である。何の縁が、衆生をして、この一世から、あの一世へと、転生させているのか？

縁起の法には、合計　12　支がある：「無明縁行、行縁識、識縁名色、名色縁六入、六入縁触、触縁受、受縁愛、愛縁取、取縁有、有縁生、生縁老死愁悲苦憂悩、如此生起了整堆的苦悩」
縁起の法の法則とは：「此生故彼有、此生故彼生；此無故彼無、此滅故彼滅」
「此有故彼有、此生故彼生」とは、無明という原因があって初めて、行が有る；
行という原因があって、初めて、識がある；以下類推。

「此無故彼無、此滅故彼滅」とは、無明が滅すると、行が滅する；行が滅すると、識が滅する；以下類推。

「縁生縁滅」は、縁起の法則である。仏陀は、道を証悟した後の、最初の一週間において、12 縁起の省察を開始したと言われている。

縁起の第一支は「無明縁行」である。無明とは何か？　　無明の特徴は、心の盲目性、または無智、智慧がない事、である；その作用は、迷い、惑う事である；現起（現象）は、隠蔽、または目標の真実法を、徹底的に知ることができない、である。というのも、無明は、我々の智慧を隠蔽し、我々をして、欲楽の禍をはっきりと見ることができないようにさせ、また、世間の一切の法は、みな生・滅して無常であるという事を、はっきりとみる事ができないように、するからである。経蔵によると、無明とは、四聖諦を知らない事を言う；アビダンマによると、無明には八ある；
一、苦諦を知らない。
二、集諦を知らない。
三、滅諦を知らない。
四、道諦を知らない。
五、過去の五蘊を知らない。
六、未来の五蘊を知らない。
七、過去の五蘊と未来の五蘊を知らない。
八、業力及びその果報を含む所の、因縁の法則を知らない。

実際、無明は、上に述べた事柄を、知らないだけではなく、錯覚も含まれる。
どのような錯覚か？　　我々は以下において解説するが、まずは「無明縁行」の説明をする。

「行」は三種類に分けられる、すなわち；非福行、福行と不動行である。非福行とは、一切の不善業を言う。
身・口・意の三門は、10 種類に分けることができる。すなわち：
身不善業は三種類――殺生、偸盗、邪淫である。
口（＝語）不善業は四種類――妄語、離間語、粗悪語、雑猥語。
意不善業は三種類――貪婪、瞋恚、邪見。

福行は、欲界善業と色界善業を含む。
欲界善業は、布施、持戒、禅修行、尊敬、奉仕、功徳の回向、功徳の随喜、仏法の聴聞、仏法の宣揚、已見において正直である事の、　10 種類である；
色界善業は、初禅、二禅、三禅と四禅の事である。
不動行とは、無色界善業を言う――空無辺処禅、識無辺処禅、無所有処禅と非想非非想処禅である。

無明はどのようにして、行の縁となるのか？
無明とは苦諦――生・老・病・死、愛別離、怨憎会、求めて得られない苦と、五取蘊の苦を知らない事である。無明が生起する時（因・縁）、衆生は、五蘊に執着するのは、苦であるという事を知らず、またその上、それを知らないだけでなく、五蘊への執着を、楽しい事だと、誤解してしまう。故に、天人五蘊を得たいと思う衆生は、積極的に布施をするし、持戒もする（天人五蘊は、所縁縁、親依止縁）；

天人五蘊を得たいと思う衆生は、積極的に布施をし、持戒をする（親依止縁）；
梵天に生まれたいと望む衆生は、積極的に色界禅定、または無色界禅定を修習する（所縁増上縁、親依止縁）。上記の事は、衆生が、五蘊を得て輪廻する事は、楽しい事であると、誤解している事からくるのである。ここにおいて、無明は縁法であり、無明は、因縁の縁力を通して、衆生に非福行、福行、不動行を実践せしめ、輪廻を延長せしめる（＋事が分かる）；非福行、福行と不動行は、縁生法である。衆生が、瞋恚によって、非福行を為すとき、たとえば、殺生、偸盗などを行う時、不善身門と意門心路が生じる。（＋この時）二番目の速行等において、無間縁、等無間縁、無間親依止縁、数数修行縁、無有縁、離去縁（などが縁として作用する）。

瞋恚心（縁法）が生じる時、因縁によって縁生法（＋の作用）が働く――相応心所と俱生心生色法が生起する。心と相応心所は、俱生縁、相互縁、依止縁、相応縁、有縁、不離去縁を縁とする。その他の 11 支――「行縁識、識縁名色、名色縁六入、六入縁触、触縁受、受縁愛、愛縁取、取縁有、有縁生、生縁老死愁悲苦憂悩」は、読者の皆様が、己自身の智慧で以て、領悟して頂きたいと思います。（終）

（翻訳終了）